

演劇会議

「演劇会議」をみんなの機関誌にするために 1
なかまの素顔 1 2

■東り演創作会議特集■

三つの報告をめぐって 山村 金平 4
課題戯曲の周辺 萩坂 桃彦 9
私たちの創作劇から 黒沢 参吉 15

■劇団活動レポート■

必要な仕事、やりたい仕事（劇団・いこら） 栗原 省 21
趣味のグループから闘う集団へ（上野市民劇場） 杉森 正美 31
関東B演技ゼミナール 津村 雪雄 36

■劇評■

郡上の立百姓（新劇場） 桂 恵美 39
でっち上げ（劇団京芸） 仲 武司 40
岡崎芳三 42
おふくろの歌（京浜協同劇団） かわだりょうじ 42
ワッサ・ジェレズノーワ（民芸） 萩坂 桃彦 44
おりん口伝（弘前演劇研究会） 黒沢 参吉 47

■西り演縦会をふりかえって 土屋 清 49

東西南北／活劇めも／編集後記

1968年6月

東西リ演／北海道演劇集団組織図

「演劇会議」をみんなの機関誌にするために

一月一〇日、山梨石和での東リ演運営委員会で二時間ほどやつた機関誌「演劇会議」のための討議は有効でした。

冒頭、「何のためにだしているのか」等と辛辣きわまる質問がでたり、『うちの劇団じや殆どの劇団員が読んでいない』という否定論と『大部分は読んでいる』という肯定論が火花を散らしましたが、だんだん話しあううちに、今までの機関誌への不満と、充実した機関誌がほしいところに焦点がしぼられました。

- (4) 対者と自己の発展を原則とした批評活動

(5) 専門劇団への創造の中味での批評活動

(6) 創作戯曲の紹介と批評

(7) たとえば私たちの「俳優紹介」のような、親近感のある企画などであり、実際編集の心がまえとしては

(A) 機関誌は読者をおいてきぼりしない—全体の一歩前ぐらいを行くつもりでやること。

(B) 古い劇団と古い人を中心から、新しい劇団や若い人々に執筆者をひろげること。

(C) 長期の編集企画をもって、かき手にゆとりをもたせ、原稿の選択を可能にすること。

(D) 読みやすく、おもしろい誌面をつくること。

I) 必要とされました。

この号が従来の七号よりも、多少とも進歩しているとすれば、運営委員会の批判を反映したためですし、今後いつそうこうした援助がござります。

式文書のよき論文や、『ドグマとセクト性のつよい記事』や、『問題点のえぐり方の浅い羅列的な活動報告』などが不評をこぼりました。『誰に読ませるのか』が不分明なところから編集企画性がとぼしく、事後処理におわっているとの批判は残念ながらみとめなければなりません。

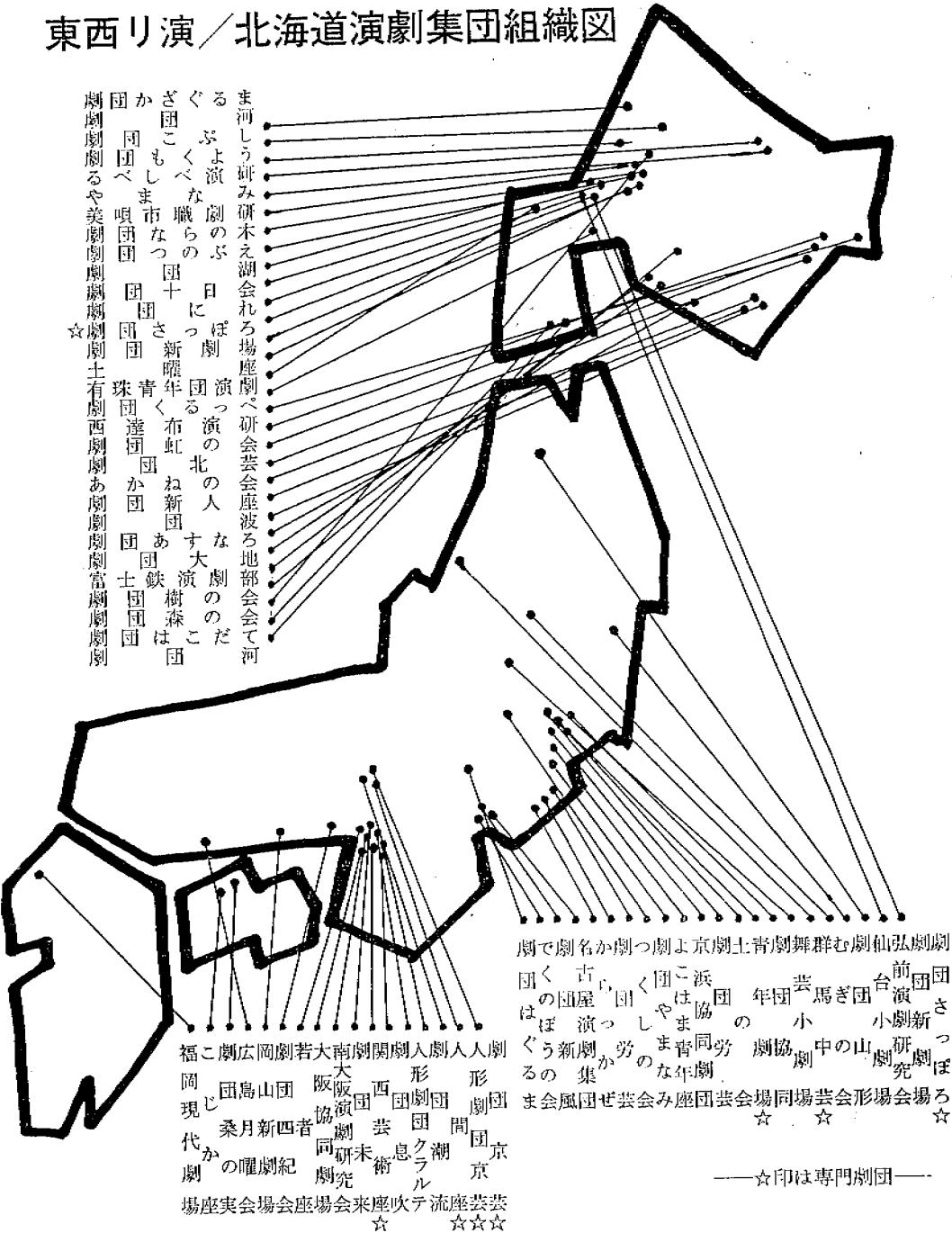
- みとめなければなりません。

では、どういう内容が機関誌にほしいか、ということでだされたのは

(1) 劇団で全体の討議學習をおこしらる中心論論文

(2) その集団のしごとのプロセス、中心の問題点を明らかにする活動報告

(3) 創造内容のわかる上演活動の記録



なかまの素顔 1



若尾 隆子さん

— 名古屋演劇集團 —

よ、それで飛びこんだの。正也はひと月位あとに早稲田をでて入ってきてね私の方が一月先輩だからスポーツの使い方なんか教えてあげたわ。あんまり話はしなかつたけど、汗まみれになつて働いてるところ、お互に見てたんだとおもうの。」

「銀婚式」というと、結婚されたのは……

「昭和十七年。翌年正也が兵役解除になつて、名古屋の名宝照明に移つてそれからずつとここに定着したの。」

「寅次郎をやるきっかけは可でした？」

「銀婚式」というと、結婚されたのは……
「昭和十七年。翌年正也が兵役解除にな
て、名古屋の名宝照明に移つてそれからず
とここに定着したの。」
「演劇をやるべきは可でした？」

春また沙い三月の丁合　お仁事とお古て相
しい間をぬって稽古場の寿林寺で話してもら
いました。

—銀婚式について劇団二〇周年と繰起のいい春でおめでとう。ところでズバリ、その正也氏と知り合われたのは?

経験しかないんだけど、男のメンバーの奥さん連中も皆すすめられるし、とうとうやりはじめたのね。……それに、そのころ名古屋の局でやる放送劇二、栗原吾郎で少な方言

団の中心メンバー、中心女優であり、若尾絵合舞台研究所の会計担当者であり—エネルギー・シユナその活動は、演集のみならず私たち兄弟劇団の（とりわけ女性の）目標であり

とをしている時分、埼玉の川越で生まれてから
学校は東京府立第八高女でね、卒業後二年位
花嫁修業していたけど、水の江瀧子なんかが
活躍しているころでレビューに憧れちゃつて
ね、あかりやつてればいつでも観られるでし

「高倉テルさんのヘンマ大王▽つていうか一軒でてくる東京育ちでし。そんじらしさが重なって舞台に立ったわけ。」

「特におもいでに残っている舞台は何ですか
で戦争未亡人の役でした。」

……いまの順位は、まず劇団の新旧の演技の断層を埋めることね。若い人たちの未熟さ、不充分さを年令ギリギリの限界まで成長させさせて、全体のレベルアップでいい舞台がつくれ

こと、しみじみさせただったと思う。」
たしかに師としての松原先生、パートナーとしての正也氏、なかもとしての演集をもつことは、このひとつにとつて大きいにちがいあ

「そうね……創立十周年記念にやつた『蛻変』——ぜいへんの丁先生かしら。これは曹禺の作品で、蟬が殻をぬいで大きくなっていくように、人間の思想の変革がテーマになつてゐる。もう一『へんやりたい役だな。……一番多くやつたのは『三家村』の蘇先生の奥さんとても楽しい舞台。……多いといえば『夕鶴』のつうも二十回近くやりました。以前は

たら本望。そして、お客様さんが倍になつて、経済的な心配しないで、一公演が少なくとも三ヶ月やれたらね。

それから私自身は、さつき云つた若い人たちは成長させるにはどうしたらいいか、その方法を確立したいし、演技のリアリズムといったものをつかみたい。観た瞬間、あ、リアリズムだつてものがあると思うの。」

りません。
——劇団の若い人たちとは、親子のような感じを受けるんですが……
「子供がないせいかな、本当に一人ひとり大切な子供ね、劇団以外のカップルふくめて仲人を十九回やったけれど、ここ半年の間に劇団の仲人が六組かしら。……気が若くていられるのも、いつも若い人たちの中にいる

もつとスマッとしてたんだけれど、この頑肥
つちやつて『こんなに瘦せてしまったの』つ
て科白いって立つと、客席から笑い声が……
残念！」

どうしてどうして、おたかさんは今だつて
美しい。第一、若いです。

見正の音ノコトは、

— 総合舞台研究所への期待は？
「働いている人たちが、仕事のよろこび、一緒に舞台をつくっていくよろこびをより感じるようになつたらほんとに嬉しい。」
— 結婚生活二十五年、辛いこともいろいろあつたことでしようね。

せいでしょうね。」
笑い、はにかみ、天井をあおいで回想し、「それより、こっちの方がいいかしら」と写真をえらぶ隆子さんは、創造活動にうちこんでいるひと特有の美しさと、みずみずしさと、そして強さが伝わってきます。

「現在のオーシャンは？」「劇団では演技部所属の創造委員、総合舞台研究所ではソロバンはじいたり、伝票かいたり……」
——これから抱負をひとつ。

「でっかい抱負は、早く働く者の社会にして、芝居だけにうちこみたってことだけど

「そうね……生活が苦しくて、馬鎧壁を二
つ、そのままではかきがないので細かく切
りざさんで、油であげたり。それも今では漬
しい思い出ね。……やはり一番辛かつたの
は、夫婦の感情がすれ違ったときだとおもう
な。でも、おりかえって云えることは、ほん
とに、いい人たちに囲まれて育ってきたって

話の内容が豊富でなかなか去り難かったのですが、次回公演「櫛の木」の稽古が待つてるのでお別れしました。若尾演出の厳しいダメ出しと、それに応える團員の意欲あふれる本読みを書きながら、演集と若尾さんご夫婦のいつそろの活躍を期待して……。

土「ある事故」等の批評

参加人員は二五名、集団としては、はぐるま、演集、静芸、よこはま青年座、京浜協同、やまなみ協同、土の会、労芸、舞芸小劇場、青年劇場、京浜戯曲研究会の二二團体でした。また、戦後、テアトロで職場演劇のことを精力的に書き、指導された陣ノ内鎮氏が傍聴に来られたのも印象的でした。

各報告者の話す内容を紹介するのが順序ですが、その前に、三人の報告の全般的な印象について書いておきたいと思います。まず萩坂さんは、こばやし、黒沢と云う東リ演の中の代表的な作家二人の作品の系列を、丹念にあとづけて個々の作品の紹介なども交えて、読んでいないにもわかるような話し方で、作家の作品系列の変化の中から、その作家のもつ資質将来の可能性を明らかにしました。特に、黒沢作品については、演出家として建設座時代からのつきあいがあるわけで、黒沢作品の評価の方法として、傾聴に倣するものでした。

二番手のこばやしさんは、本人も云う通り例のガラガラとした調子で、作品の紹介などもなく、いきなりすばりと、この作品を読んでどう感じたとか、何ページのこの人物の登場んでいない人にもわかるような話し方で、それが戯曲として持つ長所、欠点についても触れていました。きわめて、ていねいな話し方と云うべきでしょう。

萩坂さんは、こばやし作品「加波山」「こわれないものはない」「ひずみ」「風化」「つくられた英雄」「糠の木」「書けない黒板」「郡上の立百姓」と分析して、最後の作品が、矢張り、最大の力作でもあり、一番よくまとまっているとしています。現在の完結度を破り、第二期の展望を開くものとし

場の必然性はよくわからないとか云つた話を展開しました。その作品を読んでいない人に

は、何が何だか、よくわからない筈なのです。が、それでながら、彼の云おうとしている

作品の出来不出来と云うのが、作家の主観だけでなく、それが現実の作品をぐぐりぬけて、どのように描かれているのか、人間がどのように表現されたかにあるのだと云う趣旨は大変によくわりました。

三番目の黒沢さんが報告の対象とした作品は、東リ演の活動の中から、新しく生れて来た作品と云ってよいと思います。したがつて、作品が現実に深く関わる部分、それがどのようにえぐり出されたかと云うこと、個々の作品について細かく検討して、なお、それが戯曲として持つ長所、欠点についても触れています。きわめて、ていねいな話し方と云うべきでしょう。

萩坂さんは、こばやし作品「加波山」「こわれないものはない」「ひずみ」「風化」「つくられた英雄」「糠の木」「書けない黒板」「郡上の立百姓」と分析して、最後の作品が、矢張り、最大の力作でもあり、一番よくまとまっているとしています。現在の完結度を破り、第二期の展望を開くものとし

て、「つくられた英雄」を評価しています。この作品は、原爆投下のパイロットを素材にしかも舞台をアメリカにとったと云う、作家の機感が生れると云うドラマではない。作者が登場人物を設定した時、すでにそこにドラマがあり、作者がそれを克明に解き明かしていくことがあるとか、話が展開する過程に次第に危機感が生れると云うドラマではない。作者が書かない。それでいいのだと云う考え方がある。つまりして、枝葉はあくまで枝葉であり方をわからなくするようなことはしていない。」

ドラマがどのようにして設定されているかについては、「コンストラクションの中にドラマがあるとか、話が展開する過程に次第に危機感が生れると云うドラマではない。作者が登場人物を設定した時、すでにそこにドラマがあり、作者がそれを克明に解き明かしていくことはしない。だからと云つて、テーマが多様で社会との絡み方が複雑でも、人間の把え方をわからなくするようなことはしていない。」

まずこばやしさんのテーマのおき方ですが、まずは、大変に大胆な試みの作品です。以下、萩坂さんの話を要約します。

作集 創演特議 東会

三つの報告をめぐつて

——第一日目のまとめ——

山 村 金 平

作集 創演特議 東会

東リ演が創造的に交流出来ること、これは東リ演の目標であり、課題もあるわけですね。お互いに芝居を創っている集団が集まつて出来た組織ですから、具体的に、お互いがどんな仕事をしているのかを知ること、それが手っ取り早い相互理解の方法でもあり、また相手の仕事を見ることで、多くのことを学ぶことができるはずです。

しかし、北は北海道から、西は岐阜まで伸びて、さらに日本列島に沿つて、西リ演までも含めれば、九州にまでも行きつく、全国的なつながりですから、おいそれと簡単に、相手の舞台を見ることなどは出来ません。

専門劇団の地方巡演と云うのはありますがあくまでの所、我々の公演活動は、地元中心が大部分ですから、簡単には持ち運べないと云つてさしつかえないでしょう。(青年劇場の東リ演加盟は、そんな意味で新しい局面を開く

(と思ひます)

います。こばやしさんの報告にもありました
が、質的にも向上して東リ演と云う組織のもう一つ意義が、こうしたことではっきりと確認されて來ているのではないでしようか。

東リ演に対して、ある専門演劇人が、芝居は下手だから得る所はないが、作品だけは使えるのがある、といつた風なことを云つたとか云わないとかで、議論があつたように聞いていますが、作品というのが、共通の財産となりやすく、交流の便が多いということを考えれば、評価され得る作品が生れて来ることは喜ばしいことと考えていいのではないでしようか。

さくて、第一日目は、静芸の山崎欣太さんを司会にして、次の三つの話が行なわれました。

(1) 萩坂桃彦(労芸) こばやしひるしと黒沢参吉の作品について

(2) こばやしひるし(はぐるま) 「おりんの宿」 「人間が闘う時」 「私学教師」 の

批評
(3) 黒沢參吉(京浜) 「九〇五列車接近」 「國治を帰せ」 「南下する日のために」 「メコンデルタ」 「田んぼの歌」 「黒

とがない。」

では、それはどこに山來し、描き方の特徴はどうなのかと云えど、「ひとつは、学校の教

師と云う職業に由来すると思う。それで、わからぬ人に何かを教えると云う理が、わからぬ人に何かを教えると云う理知派でなく、対象に対する粘着性が強い。何かを書かないでいられない。それを書きこんで行くことで、そこに人間が出て来る。調べて書く作家のどんらんさ、実証性が出て来る。」

それでは、出来上がった作品に文句なしに満足するかと云うと「作者の持つ正確さ、手固さが、作品の上にある一定の規格品的印象を与えてしまい、おれはこう云いたいんだと云う大胆さが出て来ない。」としめくくりました。

次に萩坂さんは、黒沢作品を系列的に、五つの時期にわけ、第一期（昭一一年より戦前）「画工樂右衛門」を書いた、第二次川崎協同劇団の時代でスタートは、階級的とか云うのではなく、若い頃、ロマンローラン、ベートヴェン、白樺に心酔したある種のヒューマニズムから出発して、書かずにはいられない情感が先に立ち、テーマはあとから出る。そして、この傾向

こばやしさんは、東リ演五年目で劇作家の展望ということから話を始めました。

「北海道でも高校演劇用として、六四本の脚本がつくられている。しかも、いずれもが現実に突きささっている。組合の活動家即演劇の活動家と云うことの反映であろう。」「今から五年前に、地方でこれだけの作品が生れることは考えられなかつた」と、北海道が東リ演に加盟したことの関連づけが報告され、次に、創作部会の心がまえとして、「指摘された欠陥が作家の中で燃焼しないと、その作家が成長して行かない。それが出来るためには、今度の部会をさらに積上げるような作業が引き続き行なわれる必要」を説き、また作家、劇団の心がまえとして「自分の作品において、自分の主觀を対決させることができる人だけが前進するし、またそれが出来る力を劇団としても持つていなければいけない」と強調しました。

「おりん口伝」（作間雄二・弘前劇研）はこれ等のことが、こばやしさんがこれから展開する批評の前提なのだと思います。

「實に言葉が生きている。これは、あとの荒井、丸子に比して際立つてゐる。我々の明治、我々の近代化はどういう苦惱を背負つて

は、その後の時期を通じて、作者の本質的な資質のように思われる。

第二期（昭二四一七年）「千代の手紙」

「深い蛇」「思郷」「日鋼室蘭」などの戦後

を代表する作品で、前記の特徴が「千代の手紙」に、最大に現われてゐる。啄木の歌がふ

つと、浮かぶと一晩に六〇枚の「思郷」が書

け、それが書き終ると、もう、次のことが原稿用紙に浮かぶと云う速さがあった。作品を書くことで作者の思想の發展がある。作品が

全てであつて、それ以外の所で作者の思想の發展があまりない。その辺に、作中の人物が

作品の展開の中でがくと変革すると云う嘘

を、中々克服出来ないと云うことがあったのではないか。

第三期（昭二七一九年）建設座設立、三、四年目で、第二期の終りに「日鋼室蘭」を書

くことで、社会派ドラマの書き手にバッと变成了作者が、現実に、川崎に、自分の観客を

発見した時代。「光江帰る」「媒煙の下か

ら」等を書いたが、労働者のためにきわめて

戯劇的な劇団である建設座に、娛樂劇、寸劇

を無数に書き、劇団の雑用をこなした。

第四期（昭三〇一五年）色々な試みを展開し、「炉あかり」「巣ばなれ」「三池の闘

い」等を書いたが、前記の本質的なものは、矢張り色濃くあるのではないかと思う。

第五期（昭三六一）は現在に至るわけだ

が、今までの総仕合として、ていねいな作品の書き方をしている。「傷だらけの天使」

「真土村一揆」「東京金魚風土記」から「金魚修羅記」で、最後の作品が、一番豪華であ

り、作品の定型が出来てゐるのではないか。

と報告ましたが、從来、黒沢参吉が、戦

闘的な労働者作家と云う點が、彼の所属する

京浜協同劇團と二重身になつて強調され

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

い」等を書いたが、前記の本質的なものは、矢張り色濃くあるのではないかと思う。

第五期（昭三六一）は現在に至るわけだ

が、今までの総仕合として、ていねいな作品の書き方をしている。「傷だらけの天使」

「真土村一揆」「東京金魚風土記」から「金魚修羅記」で、最後の作品が、一番豪華であ

り、作品の定型が出来てゐるのではないか。

と報告しましたが、從来、黒沢参吉が、戦

闘的な労働者作家と云う點が、彼の所属する

京浜協同劇團と二重身になつて強調され

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

て、それは「人物のリアリティが先か、作者

の好みが先か」「作者が描寫の裏に寝ている

のではないか」「作者の思想的な發展はどう

なっているのか」と云う問題提起となり、最

後に、「黒沢参吉はリアリズム作家か」と云

う点に否定的なニュアンスを含めて、報告を

終りましたが、後半の話の展開は、時間の関

係もあって、はしょりすぎて、やや説得性を

と云う疑問を提出したように思います。そし

「敵を描くことの方が難かしい」ということを考えてもらいたい。近代的な支配というのがどういうものであるのかが作品から感じられない。支配する側が近代化しているのに、作者も含め、描かれた人間が近代化していないのでは、どうにもならない。」と強調しました。

としての価値を認め「前作よりはるかにドラマの中に入つて行ける。せりふも無理ない。ただ、風俗描写が中心になつて、きれいすぎでどろどろしたものが浮かんで来ない。生きようとする積極性が、ルンペんの中から浮かんで来ないで、あっけなく終つてしまつ。」と云うことを、ゴーリキイの「どん底」との対比で話しました。荒井さんは、チエホフの「路上」をヒントにしているようですが、読む方には、すぐに「どん底」の方を思い出させるようです。

「人間が闘う時」（丸子礼二一上演）の一
部、二部、さらに「私学教師」は、名古屋の名門校、中京商業の闘いを素材とした三部作と云つてよいと思いますが、作品のテーマが「何を描こうとしているのかよくわからな
い。そこに混乱があるのでないか。ドラマ

以上、三人の報告を振り返って見ると、萩坂さんが、実証的に作家の作品系列を分析したのに対し、こばやしさんは、実戦向きに、作品の藝術的評価をすばりと出したと思います。そして、黒沢さんは、我々の仕事の運動面から作品に照明を与えたよう思います。

当事者に対する励ましとはなつても、全体の議論を誤まる危険があるよう思います。もちろん、こばやさんの評価の方法もその逆に、技術論でばっさりと作品を切るようになれば危険ですが、萩坂さんの云つたように、こばやさんの実作的体験論に裏打ちされてゐる限りは心配ないと思います。

我々は、作品の評価の仕方に、せつからち過ぎる面があるのではないか。その点では、萩坂さんのやつたような緻密な論証が必要だと思います。

に書く必要がなかつたのではないのだろうか」と、かなり思い切つた問題提起があり、そこからコンストラクションの混乱が指摘され、「今日も明日も……」とも関連して「闘う先生が全でいいことになつてゐるが、果してどうか。闘わない先生で、生徒から信頼されている先生がいる。それをどう考えるのか。」「頭が悪いから私学へ行つたという言葉が度々出て来るがその言葉の内容こそ描かねばならなかつたのではないかどうか。」として、たとえば、最後の作品でも、「主人公の内藤先生に私学の教育が網まれていない、そこに作品の破綻がある」として、「第一部の時に、もっと徹底した批判があれば、あととの作品の問題は解消したはず」と、今までの創作部会の過程をぶりかえつて、見逃すことの出来ない問題の指摘でした。多分、第一部の討議は、一昨々年行なわれたと思ひますが、比較的、作家の主観的な意図が高く評価されて、作品そのものの出来不出来には充分な検討が加えられず、評価はするが、もし、「うちの劇團だったら上演はしない」と云つたことで終つたと記憶しますし、あの時は、一度、こばやしさんが出席しなかつたと思ひます。

第一回目は、報告だけで討議抜きですからいわば報告する方の切り捨て御免と云うことがあります。ここに提起された問題は、批判される側の作者にとつては、容易なことはないと思うのですが、充分に討議を深める問題であると思います。東リ演から生れる戯曲に、作品が公式的すぎる、批判する側にもある形式的な批判しか出来ないという点も、この辺の問題が明確にならないということと関連しているのではないか。黒沢さんの報告した作品群については、本人が別に稿を起されますので、内容の紹介は省略します。前に書いたように、作者の主観に沿つて、作品を評価しながら、同時に問題点を指摘し、最後に、次のようにしめくくりました。

「東リ演の劇作家は、現実のリアリストイックな描写法をとっているものが多い。これは、労働者、農民に観てもらわなければならぬということから来る。中央のある部分にある、難解、絶望とは違う手法というものが内容と結びついた所で、要求される。スタンスラフスキイからブレヒトへということが云われるが、現実にはつきりと目を向けた所で作られてゆく必要がある。」

かつて山崎欣太さんが、自作の「仲間の歌」について、現実が複雑化、多様化して来ているので、古典的な多幕物でなく、多場面芝居で書かざるを得なかつたと云っています。ブレヒトが、まさに同じようなことを云い、多場面、多様な手法で作品をつくりました。現実のリアリスティックな描写というものが、特定の現実ということでは、果して、現代の問題が把え切れるのか、設定は、抽象的であり、作家の頭の中に組立てられたものでも、その方がより、現実の問題をリアルに描けるのではないかというのが、こばやしさんの「つくられた英雄」において提起された問題では

題 戲曲の周辺

萩坂桃彦

東会議特創演集

こういう記録は、なるべく正確なのがいいのだろうと思う。誰が、どういうことを、どんな風に話したか、などが、ちゃんと書かれた方がいいのだろうと思う。テープの収録もあるのだから、それの復元は不可能なことで

なかつたのでしようか。
萩坂さんが、この作品に、より広い地点に
出てゆく可能性を指摘したと云うこと、黒
沢さんの第五期期に当る作品群の中での「俺
たちの夜」とか「傷だらけの天使」などの実
験も、こうした問題をふまえて、再検討して
みる必要がありそうです。この問題が、すぐ
に第二日の問題には真直ぐつながるとは思い
ません。当分、ジグザグコースをとるとは思
いますが、まさにこの問題に本当に応えられ
るもの、矢張り、東リ演の劇作家でなければ
ならないのではないでしようか。

ここに展けるのである。だから、こんどの作家会議の開催地が、神奈川県三浦海岸であるといふ関連で出席された、共産党県の文化部長、陣ノ内鎮氏は、あいさつの中で、長い演劇経歴を持つ氏自身の喜びの言葉としてもそれはいわれたのだった。一時遠ざかっていた自分としては見違えるような、盛んさをそこに見ることが出来たと。

さて、こういう前おきをふまえて、ぼくは研究集会の第二日目の模様を書くわけだが、既に、結論のようなものを出してしまった気がしないでもない。

ぼくたちは、前日の報告をなぞるかたちで、課題戯曲といつては正しくはないが、その作品から、あるいは、主題の方向の一つ、関連した創作方法のいくつかが、ひき出せるような意味合いで、ひとまず、四つの戯曲をえらび、作者の発言をふくめて討議にはいったのだ。四つの戯曲の撰択には、その方法で、必ずしも子全でないものがある。それだけに、話の内容が、その戯曲のわく内で終ることは、のぞましいことではなかったが、やはり、どうもそのへんで足踏みしたきらいはあった。

うなるのかなどと気がもめるのである。あれは、「京浜」の恩田氏が、熱心に、とりはずしの仕事をやってくれたのだった。だからさしづめ、彼を煩わせば、もう一度聞けないことはないのだが、その恩田氏についていえば、三月十六日頃に、大きな交通事故に会って、目下入院中、ということが、ぼくの場合云々でなく出てくる。そんな訳で、ぼくはこれを、自分の、よわい記憶力にたよって書くしかないが、大分、心もとない。

順序を気にせずいうと、こんどの、東リ演の創作部会、少し気取って、作家会議、はこれまでにない、といつてもこんどが三度目だが、一人の作家、一つの作品、時には一つの問題といつてもいいが、そういうものにこんどのように、時間と手間をかけて、分け入ったことはなかつたし、これを足場に、さきさき、なかなか、たのしみなことになるという確信みたいなものがもてた集会だったと、ぼくには思えるのだ。

第一日目の基調報告でも明らかになつたように、一九六七年度の、「東リ演作家」たちの、活動というものは、ぼくたちの側で、抱えてんで発表せすじまいにすることが許されないほどの、量でも質でも、とくに量では、

戯曲の一つに「南下する日のために」（たけいしむなど）があつた。作者自らが語つたように、この作品には、次のようないきさつが、書かれる上で、あつた。はじめ、それは「怒りの十年」という構成劇として発想され、村上国治をとり戻したたかいの一環として、実践的に書きつがれ、書き足され、そして時には、劇団の消長とかみ合いながら、こ

ん日のような形となつた。劇團内部からの批判のなかでも、この作品が、ある過程で、芸術的にも良くないとする意見のあつたというぼくたちは、前日の報告をなぞるかたちで、課題戯曲といつては正しくはないが、その作品から、あるいは、主題の方向の一つ、関連した創作方法のいくつかが、ひき出せるようないきさつは興味ふかい。どうやら、このへんのところは、実さい觀客とぶつかった上で芝居そのものが、「白鳥事件」の裁判闘争の、観客に与えた感銘の深さ、運動の正しさによる劇団「協同」の強化、ということに話は行きついたのらしかった。

前日の報告で、この作品をとりあげた黒沢氏は、これを、「報告劇としての正しさをふんだに、話の内容が、その戯曲のわく内で終ることは、のぞましいことではなかったが、やはり、どうもそのへんで足踏みしたきらいはあったもの」として評価した。青年劇場の実際に役だち、活動家をも生み出したという「國治をかえせ」が感覚的なものとすれば、この方は、論理的に掘り下げられており、多場面を駆使して、事件の本質をときあか

し、説得力を持つ、というようなことだつた。これは、その舞台を観た中沢氏（京浜）が、書かれる上で、あつた。「つきさつてきた」という表現で受けとめられていた。

しかし、実はこの戯曲の半面には、現存の「村上国治」を、その人間くささにおいて、まるごと、どうとらえて見せるか、という至難な問題があつたのだつた。

ただ、えらい、えらい、では、そのえらさ易ではない。こばやし氏は、「村上国治が出て行くだけで、芝居としては大変だ」という手短かな言葉で、多くを言外に托したのだった。ぼくが、ピント外れのように、広津和郎の「松川裁判」の記録の忠実性の持つちからることなどいだしたのも、やや、犬の遠吠による劇団「協同」の強化、といふことに話は行きついたのらしかった。

前日の報告で、この作品をとりあげた黒沢氏は、これを、「報告劇としての正しさをふんだに、話の内容が、その戯曲のわく内で終ることは、のぞましいこと」として評価した。青年劇場の実際に役だち、活動家をも生み出したという「國治をかえせ」が感覚的なものとすれば、この方の、論理的に掘り下げられており、景の描き方はもつと凝縮されること、場景のシチュエーションが並列的であること、日常的に似に似に批判である。

しかし、この遠慮がちの批判も、作者には思いあたる節もあつたらしく、さ拉にこの戯曲を、本格的なドラマに推進してゆく勇気が湧いたかの如く、ぼくには見えた。

一方をしたが、少しの誇張があるにしても、来年、一年の展望にかけて、それは十分具体的なこととして出て来るやうな誤合であった。もちろん、こういういい方は、おめでたすござると、いわれそつうではある。実の所、その日自押しの作品というものは、そのつながりで、作品と作家が、自白押しに出たのだった。岐阜「はぐるま」のこばやし氏は、このことを、「地方が中央を包囲する」といういふ方をしたが、少しの誇張があるにしても、来年、一年の展望にかけて、それは十分具体的なこととして出て来るやうな誤合であった。

もちろん、こういういい方は、おめでたすござると、いわれそつうではある。実の所、その州の、劇団「いこら」の「のんだくれ」（宇田貞三）でも出来、全国巡演の青年劇場の「國治を返せ」や同じ白鳥事件の、劇団「協同」の「南下する日のために」（たけいしむなど）でも出来るといったようなことである。

たしかにそれは、あちこちだが、それだけにそれらの戯曲の書き手たちが、どれだけ、その作品のあらわれ方にふさわしく、地域の劇団と觀客の育くみの中で、生れて來たかを語るのである。これはやはり、きわだたせて云つていいだらうとおもう。

そういう書き手たちの、膝つき合せた話し合いか、そこに、熱っぽい、ちからに入つた、交流をかもしださないはずはないし、や

るが、あちこちに拾い出せるという在り方、たとえば、北海道では、高校演劇の脚本が六十本も書かれていて、その中で、「ノコンデルタ」（浅見祐治）のよう、取材にして

いる戯曲が、相当の成功度をもつて生れてきていたというようなこと。東北の弘前演研からずぶといちからで、「おりん口伝」（作問雄

二）が出て来たというようなこと、岐阜「は

生活をそのまま場景にはめこむたり散漫さのあることなど、前日での黒沢氏の報告における指摘は、作者もうけとめていいだろうと思う。

ば、報告劇、記録劇のむづかしさを、そのすぐれた面と、なお克服しなければならない面とを殆んど同時に提出した作品だったのである。劇団の実情にそくして書かなければならぬ作者の立場での、積極面、消極面の問題とも、それは関連してくるが、この点で、たけいし氏の立場に共感を示した「労芸」の荒井君の發言は、かれの立場をも語っていて興味ふかい。

次に、「ぼくたちの『蒼氓の宿』」が粗上にのつた。「ぼくたちの」には少し、説明が必要るのである。これを書いた荒井敬亮は、「ぼくも所属している『労芸』」のいわば座付作者である。もう一つは、この作品は、五月の上演をめざして目下稽古中ということもそれに付加されてくると、文字どおり、「ぼくたちの」になるだろうと思う。この作品を少し立て、入って討論して見ようということになつたのは、そこに、黒沢氏の好意があつたからなのだった。必ずしもその中に、諸般の問題が内

これは膚色ものとして、問題点を浮ひ上らせるための討議資料だったのだが、作者不在のため、その目的は十分には果しえなかつたようだつた。原作と合せ読んでいる林明子君（芸芸）の、小説では自在な描写も、芝居の設定では可成の拘束を受けていること、逆に小説で、それ程重要でない人物が戯曲では作者の付与した性格をもつて色彩りを添えていふおもしろさなどがいわれたが、殆んど、口を揃えて出たのは、日本語、とくに方言を巧みに消化したせりふのうまさ、ということだった。事実、それは、この戯曲の成功度の大半を決定するのだった。

ここに、ぼく自身の、「おりん日伝」の読後評があるので、再録したい。それは、ほぼ批評された他の諸氏の意見とも合致するのである。

時代は、明治三十四年から三十九年にかけて。場所は秋田の荒川鉱山。舞台は、鉱夫人足の口入屋東畠組吾作の主屋、広間、水屋等。随時、照明による他の場所の設定もある。表題のおりんというのは、鉱夫和田千治郎の女房である。二児をなし、のち、千治郎が鉱山の巡視頭に撲殺されてから後妻に行く

在するといったことではなくて、ここの中、一作ごとに苦吟をしている荒井君に対する、はげましのようなことで、それはあるらしかった。

この作品については、ほくはおのずから作者とともに、その批判に対しても身になるのだった。荒井君が、作家としても、批評家としても、こばやしひろし氏を、その一言半句にすらもかかわって、反撥したりして、歯ぎしりしてみたり、発憤したりしているのは、彼の創作途上の苦しさを表現する身悶えにすぎない。

「蒼氓の宿」は、可成純粹に、作者自身の創作意欲の具象化であると見ていいだろうとおもう。前作の「今日も明日も俺たちは」では、その、収材及びテーマにおいて、お仕着せだった。ぼくはこれを、良い意味でいって、いるのだが、それ故に、彼にあれが書けたといふこともあつたし、劇團の運動としても、公演としても、成功といえるものになつたのだったが、彼が、書かせられた「争議団物語」（今日も明日も俺たちは）から、自ら書く気になつた、晶川版「どん底」とぼくが冗談にいう「蒼氓の宿」への推移は極めて貴重である。

その意味では、こばやし氏の「習作として評価する」は当っているのである。ただ、言外に、「上演には反対だ」というようなものが匂っていて、ぼくは困った。

この戯曲での、昭和五年という時代の難しさ、登場する木賃宿の住人たちのとらえ方の特質性、それが、りんかく或は表面としては出ているだけに、それを堀り下げて正当化することは、上演にさしての課題になるだろうという、山崎氏（静芸）の指摘は示唆にとみ、第一幕の人物の配置が鮮明なだけに、第二幕の尻すぼみをどうするのかという。戯曲構成上の弱点をついた、山村氏（土の糸）の発言も首肯でき、黒沢氏や小泉氏（青年劇場）あたりから出された、作品の思想性の稀薄の指摘もぼくには手ごたえがあるのだつた。

ぼくたちの劇団からは、この研究集会に四名参加したが、討議のひろばで、目頭鼻つき合している戯曲が、陽の目を浴びて、ころげまわるのを、実感的に見据える気持は、馴れ合いの稽古の数十倍もの有益さを身につけた。感じであった。

が、その夫をも病氣で失う。
戯曲は、大世帯である東畑組の家族、住込
人夫の生態を、彼らの職場である鉱山の仕事
のきつさ、および鉱業資本三菱の收奪のすさ
まじさを背景に、ときにはそれを縦糸におり
込んでくりひろげる。丁度この時代は、日本
の近代資本主義が、日清日露の戦役を経て、
確立をみる転換期であり、と同時に、近代ア
ロレタリアートが生れはじめ、そここに自
覚した労働者の、団結、躍起がおこりはじめ
た時期でもある。足尾銅山の鉛毒事件の余波
なども、この秋田の荒川鉱山にもおしよせて
くる。

おりんの夫千治郎もその自覚した労働者の
一人である。外に、職工藤田、先山の櫻井、
農夫の仁衛門などが暗々裡に連絡をとり合い
組織つくりをはじめる。会社はこれに対しても

いわば、これは、最下層の蛆虫のように踏みつけられていた、鉱山労働者が、近代プロ

くる。
観した労働者の、固結騒動がおこりはじめた時期でもある。足尾銅山の鉛毒事件の余波なども、この秋田の荒川鉱山にもおしよせて

吉)である。
これは、前夜の基調報告で、ぼくがとりあげたのだったが、うまくまとめることが出来ず、ぼく自身の考え方らが、あやふやな印象

た。一つの例として、それは、「巡回」だったが、こばやし氏の「職業として描け」という言葉、陣ノ内氏の「善玉・悪玉を個人に皈すな、機構としてとらえよ」という言葉などを、ここに記録しておくことにどめたないとおも

「おりりん口伝」のあとで、宇都宮氏（よこはま青年座）から、かんれん質問のかたちで「悪人をどう描くか」ということが出され、戯曲全体の主調音になつてゐる散文的流れと、景描写といふ風に筋はこびをしてゆくのでやや密度を欠くうちみがある。人物では、主人公のりんよりも、周囲の、点在的人物や、鉄夫の鬨いにからんでくる單発的な人物の方がリアリティにとんでもいる。

この戯曲での、昭和五年という時代の難しさ、登場する木賃宿の住人たちのとらえ方の特質性、それが、りんかく或は表面としては出ているだけに、それを堀り下げて正当化することは、上演にさしての課題になるだろうという、山崎氏（静芸）の指摘は示唆にとみ、第一幕の人物の配置が鮮明なだけに、第二幕の尻すぼみをどうするのかという。戯曲構成上の弱点をついた、山村氏（土の糸）の発言も首肯でき、黒沢氏や小泉氏（青年劇場）あたりから出された、作品の思想性の稀薄の指摘もぼくには手ごたえがあるのだつた。

ぼくたちの劇団からは、この研究集会に四名参加したが、討議のひろばで、目頭鼻つき合している戯曲が、陽の目を浴びて、ころげまわるのを、実感的に見据える気持は、馴れ合いの稽古の数十倍もの有益さを身につけた。感じであった。

を与えて、こばやし氏の反論を買うことになつた。

こばやし氏は、この作品については、黒沢作品としても良くない方に据え、戯曲の構造人物の設定等も古くさいし、金魚池が、工場やビルディングにつぶされてゆく話と、そのおしつぶす工場の背景にベトナム特需があるというからませ方には無理がある。つまり、金魚池にしがみつく庶民の悲しさというものと、ベトナム戦争反対の思想とは相容れぬというのだった。もつとも、こばやし氏の批判は第二稿に寄つていて、

金魚池とベトナム問題を二律背反的にうけとつたことは、ひとりこばやし氏のみではなく、中川氏（甲府やまなみ）の、金魚池には解決はあるが、ベトナムには帰結がないといふ批評や、小泉氏（青年劇場）の、人物の描かれ方が、心情的すぎる、ベトナムの影はもつと色濃く提示すべきだ、ということなどもやはり、同じ立場での言葉だったといえるだらう。また、ベトナム戦争の持ちこみかたが「恐怖感のみ」で果して十分にときあかしうるだらうかという宇都宮氏（よこはま青年座）の発言もそこに加つたりした。

ぼくは、三稿（劇団未来上演台本）を読ん

のだった。それは、三代（かりに、明治・大正・昭和といつてもいいが）にわたる庶民の歴史である。

結果として、それは、そういう意味での伝達力はもちえなかつたといえるが、それはし

だ上で、金魚池とベトナムの二律背反は感じない。むしろ、このからみ合ひは、舞台が、

川崎という京浜工業地帯である現実面で、実際にそのことはあるのだし、その設定そのものを誤りといふのは当を得んだろう。むしろ

とかかわつてくる、街の青年、労働者たちが描ききれぬ、ひいてはベトナム問題を書く者が、やはり、それを避けたところでは、作者の前進はなかつたらうという考え方だつた。

むしる、この際、作者に提示したいのは、人物設定が、この作者には既に常套的になつてゐるフィクティティブな感を脱しきれておらぬといふことである。ほくは、それを「うまさ」の一部として言葉にして、「うまい」というのに問題がある」と陣ノ内氏から指摘された

が、流动している現実の把握はやはり锐いけれどアリスチックな目でしか正しくつかまれぬということに結論は行くのである。

これは、代表的な東リ演の書き手の一人である黒沢氏に対して決して、過当な要求ではないと思う。

さて、さいごに、こばやし氏がいつた「古き」ということに若干ふれて、しめくく

りにしたいのである。

あれは、こういうことででもあつたのだろうか。「金魚修羅記」の四幕の構成のスタイルが、イプセン以来、書き古されたスタン

ードの城をこえていないこと、幕あき、幕ぎととかかわつてくる、街の青年、労働者たちがじ作者に、一方では、形式的にも内容的にも

これが、いかにもお誂えになつてること、同じくの難しさにつながつてくることかもしけどかわつてくる、街の青年、労働者たちがじ作者に、一方では、形式的にも内容的にも

は後者をとるというよらなことだつたのだろうか。

一応そだとして、その意見に同意できるめんもなくはないが、やはり、その作品の、新しさ古さということは、「見てくれ」のことではないだろう。このことでも陣ノ内氏もいわれたが、やはり、内容にかかわつてくるわけで、あくまでも、現実へのきりこみ方の方法の問題としてそれはあるべきだらう。形式は新しいが、古い内容ということもいえるのである。

「金魚修羅記」（題名の中の修羅という言葉はこの場合誤用されていることが話題になつた）では、作者は、あの形式で、スタンダードな、ナチュラルな形式で、描きうるといふ確信が、テーマとかかわつて、あるはずな

かし、戯曲の形式のもたらしさ不十分さではなくて、やはり内容の燃焼度の不足だつたのではないか。

ことわるまでもなく、これは、こばやし氏の言葉尻をとらえての反論などではなく、ま

を、ズシンと教えてくれる作品です。

舞台を国鉄の小さな地方駅の構内詰所と本屋にとり、ヒルから午後一夕方という三場の設定で、日當性の中へ非日常的な合理化が音

たてでかみこんでくる状況を、力んだり理屈ばかりしたりしないやり方で描いているところに、現場労働者である作者の現実へのたしかな視点がうかがえます。

駅の大切な顧客である付近のセメント会社がストライキで、毎日八〇車両の貨車作業がなくなり、連結手たちがひと思つているところへ天皇のお召が通過する、日の丸の旗をふる代りに、日頃の鬱憤から竿へくくった越中連を振つて駅長をあわてさせる労働者。

この辺先輩の国鉄の書き手、『御料車物語』をのこした鈴木元一お得意の語り口と、『拵子』をかいた野地仁の帳面書きを一体にしたリズムで、舞台にのせたら演技者はイキ

私たちの創作劇から

作集 創特 演議 東会

黒

沢

参

吉

東リ演に所属する劇団の書き手たちが、一昨六六年から六七年にかけて生産した戯曲は、約二〇〇本あります。演劇ジャーナリズムと無縁のところで、毎月平均一本の作品がうまくれていることになります。

この作品群は、まず私たちの生きてたたかう現代に正対して主題と方法をもとめていること、すべて粒よりの傑作とはいえないとしても所属の劇団が上演していることをうなづかせるに足る力のこもつた質をもつこと、殆どが上演による観客の検証をぐぐつていることの三つに、共通の特徴をもちます。作者の

九〇五列車接近／島源造

岐阜はぐるま所属の作者は国鉄労働者。労働者が自分の知悉した世界をかくことの強味

イキ、観客はゲラゲラというところです。

天皇の親鸞で勞働休職に入つたため、浦賀貨物を至急荷だししようとするセメント会社に尻をたたかれた駅長が、駅の事情そっちのけで局へのたのんだ三〇〇両の貨車が残々可笑しか

白鳥事件の大きい経過と、村上国治さんの無罪と釈放をかちとする現在のたたかいの中心点を多くの人に知らせ、運動を発展させることに、この戯曲の超課題はおかれています。私たちの中の貴重な専門劇団青年劇場が、全国巡演という有効な方法でこの劇をひろく普

がバランスよく構築されています。これは短い時間での上演の場合とくに大切で、瑣末な部分でのリアリティや、感情的な部分での停滞をおもいきって刈りこんだことが、この本の利点になっています。

もとれない労働者は、おさえられた怒りを爆発させ、第一組合の人たちをまきこんだ駆長交渉にたちあがっていくところで幕がおりましたが、構内苦情から罪名は巻きこころく、

及したのはすばらしいことです。
報告劇というような曖昧な表現ではなく、
直接ひとを行動に参加させる目的をもった劇
形式は政治劇とよぶ方が正しいし、こういう
劇がプロセニアル内部での交流を間接的にお

考えなければならないのは、多くの人々の共感をわきおこし行動へ組織するメントをどこにおき、膨りふかく書くかですが、この戯曲にそくしていえば、観客の思考行動を自ら起爆させる要素より解説説明の要素がつよいようで、たとえば庚央に対する市民の反応と

勤務の助役（この形象、構内詰所の労働者の者がねにたつ助役とともに傑出）の当局、労働者の板ばさみの泣き笑いでしめているのは、もう一つ工夫のほしいところです。

たであろう。その知悉のしかたにあります。
はは感覺的な日常性のそれではなく、この作者
が鉄道第三次長期計画にもとづく五万人の合
理化に反対するたたかいを、自分の職場のな
かまと共にたたかう中でそのペンを研いでき
たであらう。

最高裁判決までを、自労の現場での家族の訴え、警察署での検事、警察と新聞記者のからみ、留置場での国治を籠絡しようとする検事の失敗というようにエピソードを重ね、一〇余の場面を展開するので、一発きいた弾音を二発だつた筈と警察に責められ嘘の証言をした自労の労働者が、その反省から救援活動に加わっていくところや、追平たちの法廷での偽りの証言（裁判記録によるこの場面庄巻）や、国治の看守や少年囚への配慮などがちりばめられ、フレームアップの事実と国治の人間像を描くのに一定の説得力をもちました。

しかし、この戯曲がドラマとしてのリアリティをもつためには、形象化の問題でもう一つ深い一つの問題が必要です。主題にそくしていえば、國治が何を挺子にして自己改造をとげていくのか、検事は何をよりどころにデッチあげをつくっていくのか——一般的な自明の理を超えた、ほかならぬ作者の、作者による追究が必要です。事がドラマチックだといふことと、ドラマで眞実をつくりあげることは必ずしもストレートに結びつきません。

▲國治をかえせ！』が、短い舞台に政治課題を凝縮して得た成果にくらべると、この戯曲ではひとつひとつの景の構造がまだ散漫さ

國治をかえせ！／青年劇場文芸演出部

この劇は、国治とその母を主要人物に、ナレート、シュプレヒコール、スライド、音楽等を挿入して事件を要領よく紹介し、私たちが何をしなければならないかを舞台上の弁護士によつて訴えかけるエピローグでめくくります。おそらくくりかえしての上演になります。おそらくくりかえしての上演の中で、観客からかえされた主要な意見をとりいれながら現在の本にいたつたのでしようが、事件のポイントや太い流れとアピールの力点

南下する日のために／たけいしふもと
久国治をかえせ！』と同じモチーフによるこ
の戯曲は、劇團協同で上演され、改稿作品は
日本共産党創立四五年記念の作品募集に応
じて佳作になっています。

前説の有竹ひ代作に讀んでしませんか。白鳥事件に正面からとりくんだ作者の、力量いっぱいの書ききり方を期待します。

軍の憲兵でこの村を戦略的に、自分の父をそ
の村長にしようと画策、サイゴンで兵隊がり
からのがれてきた下の従兄は、ダイスの丁半
で自分の未来をきめて解放軍に加わるーとい
つた、多分に特色ある人物を特徴的な条件に
からめて設定をすすめ、強制な説得性を發揮
しています。

肥沃なメコン・デルタに根をはつて生きる農民の一家、米帝とかいらい政府に苦しめられる家族それぞれの生き方を描きわけながら、不屈なベトナム人民のたたかいで根源にわけいつた三幕のこの脚本は、荒げざりで愛想のない魅力にとんでいます。

に変化を与える景ごとの効果も鮮やかです。京浜協同劇団ではこの作品の上演で、ベトナム人民支援行動への参加をきめ、現在作者は劇団の依頼にこたえて改稿をすすめていますが、主要な改訂点は、(1)侵略者アメリカ帝国主義の本質を可視的に描くこと (2)上演時間二時間ほどを压缩するため、シチュエーション

真正面からベトナムの現実と四つに分けて書くのは、かなり困難な作業ですが、この作品はベトナム人民を私たちとかけ離れた、超人的な英雄や行儀のいい模範民族に描きだすこ

ヨンや会話整理しテンポをだすこと、(3)グ
イスをふって解放軍に入った青年が政府軍に
捕まつて拷問こわさに裏切り、最後に米軍の
戦車を地雷攻撃して死ぬのだが、この行動を

ささえる民族的なバイタリティを説得的に描くこと、(4)従兄たちの母は正夫人、ビックの娘は妾の子という設定は、ドラマの主軸と重要に関わらないし、私たちの観客にベトナム人民への誤解をもたせないため変更すること、その他でした。

吉田農業講告文書

れた東北の農村、寡婦の野村とめは町の大ボス参議院議員丸山の子分である実家の兄、清一郎のもちこんだ指定工事施工の承諾書にハシをつくことで、娘婿の兼造を出稼させている現在の苦境をのりこえたいとおもっていますが、肝心のハンをもつてている男の仁平は、丸山の織物工場ではたらく息子の太平と一緒に、農村労働組合の活動家半三たちと反対期成同盟をつくろうとかけまわっています。

△国治をかえせ！』とともに青年劇場で全国巡演されたこの本も、観客のこえを汲んで改訂をかさねたということです。そして、農村破壊政策の具体的な実体、それにたちむかう論理や状況は二幕の中にキツチリかきこま

に煮湯をのまされる幕きれの必然性）こと
また地主と農民たちの関係、地主の家族間の
内部矛盾（とくにこの家をつぐため都会から
戻った息子のいかに生きるかの問題）を二兎
として追い、統一的に描ききれないこと等が
指摘できます。

いく中で整理しきれなくなつたそういう雑然としたものをもちろん、しかし、この戯曲にはひとをひきつけるものがあります。作者の劇中人物への並々ならぬ愛着というか、傾斜の姿勢が私たちの共感をさそうのです。サマになるからぬかより、その人物たちにおいのだけを吐きださせずにおかぬ強引きが、昔い書き手には大切な気がします。

地主一家に口をこらして、家族それぞれの生きかたをここへ出入する人物との対応から浮かびあがらせ、とくにこの作者に欠けていること今まで迫りつめる。作業を自らに

しかし、卒直にいうとそういう要求にすべ
てこたえようとするところに、この戯曲の欠
陥があるようです。過剰気味な会話ぜんぶに意
味があり、伏線のことごとくが顕現化する
ため、神経質でスキがなく、いかにも都会の
作者のかいた農民劇という感じで、読んでく
たびれるのです。

ての二幕が、とめや兼造の変化発展によつて
幕されへもちこむためつくられたシチエーシ
ヨン——娘（兼造の妻）くみ子の出産、丸山織
物の火事場での太一へのデッタあげ、怪我し
て帰郷した兼造に労災保険がおりる等——が、
いかにも都合よいはこびで、せつかかくの書き
だしの重量感ある世界を甘く軽くしてしまつ
たのは惜しまれることです。

を無視して、書き手の願望をそれに背負わせてはいけないとおもいます。幕されでとめが、隣家の娘里子に炊飯をたのんで『うまく飯をたかなないと伴太一の嫁にしてやらぬ』と軽口をきくところなどは、かりに観客の笑いをかつたとしても、本筋でドラマの訴えたい中味から遠ざける結果を生むでしよう。この戯曲は、兼造——くみ子夫婦の現実に焦点をあ

道をめぐることでしよう。

ある事故／中川恵司

運転手と助手が一名死、事務は娘にやらせて社長みずからハンドルを握る等細な運送店。葡萄のシャンとあって甲府東京間を一日三往復。『葡萄をみると気が狂いそうになる』ほどのすさまじいそがしさ。初めての子供が生まれる予定日の夜、台風の余波の吹き降りのなかを帰ってきた運転手は、店にもう一息という地点で人をハネて殺してしまいます。社長は会社にどつても本人にどつても致命的な運転免許取消しを救うため、警察で助手にそのトラックを無免許運転したといつわりの供述をさせ、事態の收拾をはかります。

いまや、社会問題から政治問題にエスカレートしている交通戦争というモチーフの今日性と、第一幕第三幕の警察署取調室を現在時間に、第二幕の丸西運送では前日の経過を迫ってみせる巧みなコンストラクションで、一氣によみきらせる本にしており、地理的時間的なアクチュアリティとテンポのある会話はこびも、上演の場合おおいにものをいいそううです。とにかく悪い意味でなしに、書き廻れ

故郷ノ中川惠司

た違和感を感じさせます

第一は戯曲のモチーフはよくみえるのに
テーマが不分明であることです。いいかえれば、作者にこの作品を書かせた原衝動が何なのかが、わかるようでわかりにくいのです。
ある事故では、丸西運送店をおそった特殊な事件であると同時に、一方では今日の日本の総体的な歪みを象徴してもらっているので、逆にそこをついていくことで、人民におおいかぶさっている不幸の根源を説得的に示しうるでしょう。運転手が助手の身がわりを告白することで、一挙に来る筈の破滅を作者は、被害者が実は覺悟の自殺だったというドンデン返しを用いて救っていますが、これは単に轟ぎれとして呆氣ないばかりでなく、本質への肉迫の回避になつてドラマの骨格を弱めました。

第二は、人間の行動の法則が一めんでは當識的にしかつかまれていないこと、一めんではそれを無視しての飛躍があることです。前者は、とくに警察（交通課といえども権力機構の一部です）および警官を客觀性をもつ第

卷之三

わせることで、安易な解決はつかないとして
も、観客にたいする鋭い問題提起が可能にな
ると考えられます。

甲府の劇団やまなみは、この作者とつぎに紹介する中川恵司の二人の書き手をもつことで、たのしみの多ハ集団です。

△黒土△も自民党政府による農村合理化の歪みを告発した作品ですが、ここでは三幕五場という一晩もののオーソドックスな展開がものをいって、村の空間的ひろがりとそれを動かす背後のジワジワした力が感じられ、とくに村と人間の歴史が日だたぬコマ落しのようにカタツと変化していくさまをとらえた独特的のリズムが印象的です。

欠陥をあければ、かなりの説明がありながら農村構造改善事業・工場誘致・直線道路と、人間関係の設定の必然性がよわい（村の地主の娘が貧農の青年たちとつながる根拠、土地とりあげの中心的役割をはたす地主の息子と土地をうばわれる兼業農民の娘の恋愛、労働組合の活動家と農民として生きる青年の結合の基盤の不明確さ、地主が大ボスのためた達者さを感じさせます）。

その上でのこる不満は二つあります。

第一は戯曲のモチーフはよくみえるのに、テーマが不分明であることです。いいかえれば、作者にこの作品を書かせた原衝動が何なのかが、わかるようでわかりにくいのです。

△ある事故△は、丸西運送店をおそった特殊な事件であると同時に、一方では今日の日本の総体的な歪みを象徴してもらっているので、逆にそこをついていくことで、人民におおいかぶさっている不幸の根源を説得的に示しうるでしょう。運転手が助手の身がわりを告白すること、一挙に来る筈の破滅を作者は、被害者が実は覺悟の自殺だったというドンデン返しを用いて救っていますが、これは単に轟ぎれとして呆氣ないばかりでなく、本質への肉迫の回避になつてドラマの骨格を弱めました。

第二は、人間の行動の法則が一めんでは常識的にしかつかまれていないこと、一めんではそれを無視しての飛躍があることです。前者は、とくに警察（交通課といえども権力機構の一部です）および警官を客觀性をもつ第三者的立場に描くことに代表的にあらわれ、後者は、店の労働条件に不満をもつ助手と店

しを用いて救っていますが、これは単に喜び
れとして景気ないばかりでなく、本質への肉
迫の回避になつてドラマの骨格を弱めまし
た。

第三は、人間の行動の法則が「一めん」では常識的にしかつかまれていないこと、「一めん」ではそれを無視しての飛躍があることです。前

者は、とくに^{新規登録}（交通課といふとも權力的^的）三者により描くことに代表的にあらわれ、後者は、店の労働条件に不満をもつ助手と店構の一部です）および警察官を客觀性をもつて第

性と、第一幕第三幕の警察署取調室を現在時間に、第二幕の丸西運送では前日の経過を迫ってみせる巧みなコンストラクションで、一氣によみきさせる本にしており、地理的時間的なアクチュアリティとテンポのある会話はこびも、上演の場合おおいにものをいいそうです。とにかく悪い意味でなしに、書き廻れ

手にそのトラックを無免許運転したといつわ
りの供述をさせ、事態の收拾をはかります。
いまや、社会問題から政治問題にエスカレ
ートしている交通戦争というモチーフの今日

運転手と助手が一名死、事務は娘にやらせて社長みずからハンドルを握る等細な運送店。葡萄のションとあって甲府東京間を一日三往復。葡萄をみると気が狂いそうになるほどのかさまじいそがしさ。初めての子供が生まれる予定日の夜、台風の余波の吹き降りのなかを帰ってきた運転手は、店にもう一息という地点で人をハネて殺してしまいます。社長は会社にとつても本人にとつても致命的な運転免許取消しを救うため、警察で助

道をめぐることでしよう。
課すなら、△黒士△はもうひと廻り大きい軌
ある事故／中川恵司

ら農村構造改善事業、工場誘致、直線道路、土地とりあげの問題が可視的に鮮明でないことと、人間関係の設定の必然性がよわい（村の地主の娘が貧農の青年たちとつながる根拠、土地とりあげの中心的役割をはなす地主の息子と土地をうばわれる兼業農民の娘の恋愛、労働組合の活動家と農民として生きる青年の結合の基礎の不明確さ、地主が大ボスのため

△黒土△も自民党政府による農村合理化の歪みを告発した作品ですが、ここでは三幕一場といふ一晩もののオーソドックスな展開かものをいって、村の空間的ひろがりとそれを動かす背後のジワジワした力が感じられ、とくに村と人間の歴史が日だたぬコマ落しのようにカタツと変化していくさまをとらえた独特のリズムが印象的です。

わせることで、安易な解決はつかないとして
も、観客にたいする鋭い問題提起が可能にな
ると考えられます。

リアリズム演劇だと、全く想像もつかぬことです。その所謂反修路線なるものが、リアリズム演劇創造の理論として、いかにも、不毛の争論であることを、西リ演縦会は実践に則して、もつともっと追及しなければならなかつたのです。

達「いこら」は「いこら」なりに実践的に、その秘密を知る術はない
めてゆく以外に、その秘密を知る術はない
かも知れない。私は、西リ演説会に一ぱり
て参加し、そんなわかり切ったことをあらわ
めて痛感したものでした。

二
音譜考

た。今日、國家獨立資本主義は、日本の労働者、農民を搾取する手段として、社外工・臨時工・組夫・店員・貧農・失業者等を利用しています。

これが、しかし、それが差別へ側面を取るの背景には、一貫して、歴史的身分差別が温存利用されてきたのでした。

その点私にとて、西里済は参加していく十数集団が、殆んど五年から十年以上の活動

経験をもち、数々のすぐれた舞台創造の仕事を果してきたにもかかわらず、なお、経営難と生活苦、職場からの圧迫、病気などに苦し

「信太山自衛隊差別事件」について記憶されているかもしれない。
「劇団・いこら」はその闘争の中から生れた演劇サークルです。

井山野炭鉱ガス爆発事故の二三七名の犠牲者中一六六名は下請けの組夫であり、その大半が未解放部落民であったこと（部落問題研究）

み乍ら、どろどろと創造普及の闇いをつづけている報告にひどく衝撃をうけました。こんなにも同じ仲間たちが、私達のような新らし

私達のサークルの歴史について報告する前に、少し部落差別について書きます。

所の雑誌「部落」一九〇号・二〇三号参照) や、私の勤務地の失対労薪者の八割近くが部落の人達である事が、端的に物語るようだ。

いサーカルの何倍もの苦労を背負ひ乍ら、利害の倍も三倍もの長い年月、舞台を通じて闇にいつづけて来た——その力は、一体どこから生れたのだろうか？　この人達は恐らく舞台の仕事が誘いかけるあの不思議な魅惑のとりことなつた人達ばかりには違ひない。でも、なぜ西リ演の仲間は、こうも地味にねばりづよいのだろう？

『アリアズム演劇の創造・普及』という短い相言葉の中に含まれていて内容の重量を私

小説『橋のない川』の著者、住井すゑさんは「人間が差別される、というしくみの中に生きている限り、差別の問題は、日本人全体の問題であって、それからのがれる者は、まれにありません。」といわれます。（汐文社・刊　解放新書『現代日本の差別』一八五頁）

戦前、私達は朝鮮人・中国人・東南アジア人の諸國民を差別し、抑圧することで、逆に天皇制国家主義権力の人民支配を許してきました。

しかし、未解放部落の歴史を、暗い屈辱の色あいでぬりつぶそうとすることは誤りで、それは日本の心情主義（センチメンタリズム）というべきでしょう。

和歌山の勤評闘争のとき、部落の父兄や子供達が「七者共闘」という闘争組織の中核と全国二百万の部落の仲間は階級差別と身分差別の二重の桎梏のもとにおかれているのです。

かで、^{かで} 教道^を 伝^はぐ 他^の 分^派者^を 助^はな^した。 に、 部落^の 仲間^は、 常に 人民^の 団^いい の 先頭^立つ 解放^{への} 道^を きりひらいて きたのです。 真に、 自らの 苦しみと 要求で 立上る者^こ 差別者^へ の 憎しみを こめて、 本当に よく 団^いい のです。 私達^は は この 解放^{への} 開^拓 に 参加^し しました。 部落^{のお}い やんや おばん^に 学ぶことによつて、 四年間活動して 来られたのです。

う疑問、ないしは反省である。劇「茨とラバ」をみた解同の活動家は、「今まで自衛闘争をやつてきたが、それがどういう性格闘いか今やつとわかった」といった。別の同支部長は「差別はあつたろうが、六十四差別をうけたなんて、いくら自衛隊でも今信じられなかつた。芝居みて、はじめて白いことを、一二つてはいる。事半の闘

「…」
このように書いてゆくと、「ああ、あの事件か」と思い出す方も多いだろう。しかし差別事件について「知る」ということはどううことだろう。

三、茨の仲間たち

「劇團・いこら」誕生!

三年前、私は、雑誌「部落」に「茨の仲間たち」という文章を書きました。それは私達のサークルが生れて十ヶ月ほどの報告を断片的にまとめたものでした。

うなことがかかれている。「陸上自衛官二等
陸曹畠山菊太郎が北海道から彼の郷里和歌山
にほど近い、伊丹第三師団信太山普通科連隊
に転属してきたのは一九六三年三月のことで
した。畠山が、部落出身だということは、北
海道の頃から隊内で知られており、そのこと
で、五、六年ぶりに信太山に赴くことにならっ

部隊を包围した大集会、自衛隊という反人道的権力機構内での非人道的差別への怒りは文字通り燎原の火のように燃え拡がった。

しかし、自衛隊員、畠中薦雄氏にとって、まさにその時点以降の、隊内で生活そのものが、一步一歩自刃を踏むような緊張した日々だった。隊内での差別は、よりひどくなってしまった。

X

三

◎「戯曲・美とラババ」誕生
信太山自衛隊差別事件について、本誌
(註、雑誌「部落」のこと)にも報道された
し、昨年度(註、昭和三十九年度)解放同盟
が闘った重要な差別糾弾闘争の一つとして、
各種の集会でも報告され、御存知の方が多か
ろう、と書いて、ハテナと首をかしげた。本

た。信太山に着任以来、彼に対する評議差別は一層はげしくなり、仲間はずれや差別言辞はてはわざと食事を忘れたり、嫌がらせをいつたり、その回数は六十二項目に及びました。『差別は心のもち方にある』と信じていた畠山三曹でしたが、遂にたまりかねて師団に上申し、また和歌山県庁へ調査方も依頼

貴にならなかった。そして追憶のいおり、「このこぎり事件（畠中氏はのこぎりで、直上官を傷つけたという理由で、金沢へ転属せられる。）」がおこるのである。

をうけた畠中さんは、その日から一步も外出できない。訪ねる人もなく孤独と痛嘆に焦躁した切つた畠中さんを見て私は全くショックをうけた。言葉の端々には発狂一步手前の人のように神経の極度の緊張が感じられこれはいけないと思った。

民主的な運動に昂揚と衰退の波があることは否めない。しかし当事者である畠中さんはそんなことを理解する余裕はなく、信太山集会のあの七千人の憤激で、一挙差別者を自らのもとに引据えられるだろうという予測は、日に日に焦りに変わっていった。「何かやらかして刑務所か貧倉に入れられた方がよっぽど気が楽だね」と彼は真剣にそんなことも考えていた。

私は帰つてくるとすぐ第一稿を書いた。そ私の気持は一刻も早く一人でも多くの人に隊内差別の実状を知つてもらいたいということだった。一人でも多く非人道への憎しみを信太山へ打ちこんでほしいということだけいた。

私は同行した畠中さんの弟、貞さん（註、「劇団・いこら」のサークル員で、「呑んだくれ」の作者）も同じように「これはいけない。」と感じたらしい。

私は帰つてくるとすぐ第一稿を書いた。その時、私の気持は一刻も早く一人でも多くの人に隊内差別の実状を知つてもらいたいということだった。一人でも多く非人道への憎しみを信太山へ打ちこんでほしいということだけいた。

（4）部落まわり

誰にこの芝居をみてもらいたのか？私達はまず部落の人達に見てもらいたかった。そして自衛隊差別反対のたたかいに立ち上ってもらいたかった。しかし、解放同盟の組織化が不充分なこの地区の人達の反応は予想外に冷たかった。私達はこの問題を討議し合つた。「芝居をやることだけて解放運動をやっていることになるのか？」「何のために『英とラッパ』をやるのか？」「芝居をつくり舞台を通じて観客を組織してゆくこと、解放同盟や差別反対共闘会議のような解放の組織をひろげることを切りはなしてはいけない。」

（5）部落の青年たち

出展者三十名に及ぶこの戯曲を舞台にのせる仕事を誰がやるか？

私は「有田演劇研究会」という研究発表サークルをもつてはいたが、舞台に立てる人は少ない。照明器具もなければ幕一枚もない。

昨年二月一日夜、畠中菊雄二曹の地元広川町で真相報告会が開催された時、その成功のため活躍したのは地元の青年たちだった。近代産業から疎外された部落は、各地域によつて新たな独特的な就業構造を示しているが、広川町の場合は圧倒的に土建業関係が多い。多くの青年は運転手や土方をやつてている。はじめは、部落差別には故意にふれたがらなかつたこの人達も、畠中さんの話を詳細にきくうちに、涙をしぼつて差別と闘うことを持ち合つようになつた。彼らは真相をひろく一般に

幸い、私達（私や貞さんがやつていた有田演劇研究会）の仲間の創作に対する態度は厳しかった。第四稿目を仕上げて練習に入つた時はすでに九月だった。（註、第一稿にかかってから一ヶ月）戯曲「英とラッパ」を早く舞台にのせねばならない。

◎「劇団・いこら」誕生

（1）部落の青年たち

出展者三十名に及ぶこの戯曲を舞台にのせる仕事を誰がやるか？

私は「有田演劇研究会」という研究発表サークルをもつてはいたが、舞台に立てる人は少ない。照明器具もなければ幕一枚もない。

昨年二月一日夜、畠中菊雄二曹の地元広川町で真相報告会が開催された時、その成功のため活躍したのは地元の青年たちだった。近代産業から疎外された部落は、各地域によつて新たな独特的な就業構造を示しているが、広川町の場合は圧倒的に土建業関係が多い。多くの青年は運転手や土方をやつてている。はじめは、部落差別には故意にふれたがらなかつたこの人達も、畠中さんの話を詳細にきくうちに、涙をしぼつて差別と闘うことを持ち合つようになつた。彼らは真相をひろく一般に

知らないために連日連夜かけまわつた。

私は彼らの中の幾人かに相談した。しかしほとんどが例外なく、「芝居かあ？ 芝居はどうもなあ」というのが返事。「うら、人の前で物らよう云わな」「第一ふう（風）悪いわ！」とくる。そういう連中をキクオが根気よく説得してくれた。こうして「芝居やるのは嫌いやけど、解放に役立つのやつたら、がまんして出たるか」という芝居嫌いを含めた十六名ほどで芝居づくりがはじまつた。

（2）サークルの構成現在（註、昭和四〇年六月の）サークル員は三十五名。最年長の中村（秀二）のおいやんが六十一才、最年少のヒトシが十一才。蛇足を加えておくと、部落出身者の数は三分の一、「英とラッパ」以前に三月二十八日（註、昭和四十年）、三月二十九日、「わしとこの亭主が軍隊にとられた頃は、もっとまあ、ひどかつたんやでエ」と重く深い軍隊内差別のようすを話してくれた。私達はこの経験から大切なことを学んだ。部落のおばちゃんたちは立派な劇場で、照明や衣裳も美しくよく完成された演劇だけをみたがつてはいるのじゃない。衣裳より照明よりも内容がどれだけ真実か、という立場で芝居をやろうとしているか、彼女たちはすぐ見ぬいてしまう。演技に対する厳しい要求もそこから出してくれる。

稽古をみてもらい乍ら、自衛隊の服がないので困つていると相談すると、トンネルを二つぬけた御坊市のおばちゃんが早速とけてくれた。郵便局へ勤める青年は、古い制服をかりてくれた。

地区労では七間の幕をカンパしてくれた。

こうした無数の努力、支事が「部落解放に役立つ演劇」を仕上げるために結集され、「英とラッパ」は十一月末畠中さんの地元広川町小学校講堂で第二回公演をむかえた。この人

達は現在「劇団・いこら」友の会員として私達の活動を外から支えてくれている。

（3）稽古場

九月から教育会館の二階をかりて稽古はじめたところ、近所のおばさんたちが、「喧嘩やってるの？」とびっくりしてみにきた。稽古場がほしい！ 心ゆくまで大声で動きまわれる稽古場がほしい！ 最初にぶつかつた困難はそのことだった。その時、天の声の者たちは三分の一。その内、演劇運動の経験者は六名。

（4）稽古場

九月から教育会館の二階をかりて稽古はじめたところ、近所のおばさんたちが、「喧嘩やってるの？」とびっくりしてみにきた。稽古場がほしい！ 心ゆくまで大声で動きまわれる稽古場がほしい！ 最初にぶつかつた困難はそのことだった。その時、天の声の者たちは三分の一。その内、演劇運動の経験者は六名。

（5）名前がついた

三月二十八日（註、昭和四十年）、三月二十九日、「わしとこの亭主が軍隊にとられた頃は、もっとまあ、ひどかつたんやでエ」と重く深い軍隊内差別のようすを話してくれた。私達はこの経験から大切なことを学んだ。部落のおばちゃんたちは立派な劇場で、照明や衣裳も美しくよく完成された演劇だけをみたがつてはいるのじゃない。衣裳より照明よりも内容がどれだけ真実か、という立場で芝居をやろうとしているか、彼女たちはすぐ見ぬいてしまう。演技に対する厳しい要求もそこから出してくれる。

稽古をみてもらい乍ら、自衛隊の服がないので困つていると相談すると、トンネルを二つぬけた御坊市のおばちゃんが早速とけてくれた。郵便局へ勤める青年は、古い制服をかりてくれた。

（6）キミちゃん（十八才）「いこら」運営副委員長。好物はやきいも。「英とラッパ」ではたたかう定期制高校生。文子役、ヒトシはその弟で、小学校六年生。畠中菊太郎の子供幸夫役。彼女の家庭について少し述べたい。キミの家庭は彼女と第二人だけ。彼女ら

会）「労演」（労音はそれまでにあつた。）

(3) サークルの前進を妨げるもの

が生れ、海岸から外川村にて出来ました。千
達は直接、その創立にも参加し、又、原水禁
大会に独自の代表を派遣したり、メモリーの

と、こんな風に書くと、何もかも順調に發展しているようですが、私が、現在痛感しているのは「サークルを結成するにもさまざまな困難はあるが、それを維持し発展させることが、何よりも大切である。」

「とにかく、更に田舎である」といふことです。
そして、その障害は私達の内と外の両面にあ
ると思ひののです。外からの障害は、米日支配

権力による全人民への攻撃です。

などでそのため私達のサークルから七人の仲間が離れてゆきました。

しかし外からの攻撃は、こうした直接的な形だけでなくもつと多面的で精緻になつてい

ます。私達はマスエミやスポーツなどあらゆる生活領域で、階級意識をねむらせるための見えてこの文書にて示し、「ハニカム

思想・文化の攻撃にさしかかる「いちら」がらもそのため、二人去り、去らぬまでも参加状況がつるくなっています。しかも、

残念なことは、労働組合や、政党、民主團

体の中では、なお文化・思想闘争を政治・経済面の闘いとかたく結びつけぬ限り前進出来

ないという点が、実践的に克服されていきま

ナニヤナ。

そのように、思想文化の闘争は全人民、全労働者の闘いであるけれども、特に、その研

究會は鑑賞を直接の目的とする専門家とその集団、サークルは、自らの独自の任務として、人民の思想、文化をうちたてるにふさわ

新しい力量を蓄積し、その闘いを積極的先進的におしすすめる役割を担っているし、その先

進的關いなしには今日の日本の思想、文化闘争は発展しない、従つて人民の全闘争も強ま

「いこら」の停滞はこの「私達の演劇活動
らないでしよう。

は文化闘争の一部隊であり、平和と民主主義の全闘争過程の一つの輪にすぎないこと」

「たゞかりこそ 又それは全人民に責任をもつ
厳しい創造の闇いであること」の二面性を正
しく是之切し手、後半の、創造の激しさをせ

しかし批評せねば、筆者の創造の意図を理解するには、前者と切りはなして一方的に強調した方が生れました。

この三年「英とラッパ」の記録性をこえた「面白く良い芝居」をつくるうとして「春ん

「だくれ」創作ととり組み、私達はいつか芸術主義、技術主義の隔阂におちこんでいたのです。私達は本年「春んだくれ」を仕上げた段階で、おそまき乍ら、他團体にも呼びかけ「い

提え切れない弱さがあり、そのため閉鎖的、一面的は活動でござらんことをお許しあるが、達は直接、その創立にも参加し、又、原水禁大会に純白の代表を派遣したり、メーデーの前夜祭や、「わらび座」「ほうねん座」「カチャートシャ」などの湯浅町公演の成功のため一定の役割りを果したり、或いは和歌山市に於ける種々の民主的文化行事（関西のうなごえや、和歌山市被爆三十周年集会や第一回和歌山県下勤労者演劇祭など）にも参加したりして、和歌山市にあるうたごえセンター「ミール合唱団」と共に和歌山に於ける舞台創造活動にはなくてはならぬ存在となつていてます。前記の稽古場も病院の都合で使えなくなつたり、それからは寺、公民館、教育会館など転々としましたが、昨年末、借金で十坪弱の鉄骨（パイプ）バラックを建て稽古場問題は一応（十数万円の借金返済問題を別にすれば）解決しました。機関誌やニュースも不定期にですが出されてきました。今年一月には、「茨とラッパ」につづく創作劇第二作「春んだくれ（三幕四場）」を完成し、和歌山市民会館で第一回公演を成功させました。作者は信太山事件の島中陸吉の弟の「貞さん」です。

その攻撃が全人民に対する攻撃である以上、全人民の闘いであり、より具体的には、政党や労働組合、民主団体、サークル、芸術家、文化人、全人民の課題です。しかし政党や労働組合、民主団体には夫々の独自の目的と性格があり、従つて夫々の立場から思想、文化闘争が追及されねばなりません。専門的・芸術家の場合は、資本主義社会での芸術市場学会、ジャーナリズムでの仕事と創造、研究活動との矛盾の中で活動をすすめる為、一定の限界が生れます。サークルは職場所属団体や思想の違いをこえて、内部から人民を團結させる役割りを果しております。日本の民主主義運動の重要な一環となっています。こうして夫々が組織上、性格上、眼の、眼と特質をもつつ、全体として文化、思想の戦列を担つてゐるのであつて、その限界や特質を無視した、安易な「よりかかり統一論」や、その裏返しとしての「生活闘争は労働組合まかせ」「思想、文化の問題はわからないから、専門家や文化サーカルにまかせる」という「機械論」は、民主主義を守る全闘争を弱める結果を生み出

と、こんな風に書くと、何もかも順調に発展しているようですが、私が、現在痛感しているのは「サークルを結成するにもさまざまの困難はあるが、それを維持し発展させることは、更に困難である。」ということです。そして、その障害は私達の内と外の両面にあると思うのです。外からの障害は、米日支配権力による全人民への攻撃です。

サークル員一人一人に加えられている、労働強化、しめつけ、低賃金、物価高、無権利などでそのため私達のサークルから七人の仲間が離れてゆきました。

しかし外からの攻撃は、こうした直接的な形だけでなくもつと多面的で精緻になっていきます。私達はマスコミやスポーツなどあらゆる生活領域で、階級意識をねむらせるための思想・文化の攻撃にさらされ、「いいこら」からもそのため、二人去り、去らぬまでも参加状況がわるくなったりしています。しかも、残念なことには、労働組合や、政党、民主団体の中では、なお文化・思想闘争を政治・経済面の闘いとかたくなりづけぬ限り前進出来ないという点が、実践的に克服されていません

労働者の闘いであるけれども、特に、その研究創造、鑑賞を直接の目的とする専門家とその集団、サークルは、自らの、独自の、任務として、人民の思想、文化をうちたてるにふさわしい力量を蓄積し、その闘いを積極的先進的におこすする役割を担っているし、その先進的闘いなしには今日の日本の思想、文化闘争は発展しない、従つて人民の全闘争も強まらないでしよう。

「いこら」の停滞はこの「私達の演劇活動は文化闘争の一環であり、平和と民主主義の全闘争過程の一つの輪にすぎないこと」「だからこそ、又それは全人民に責任をもつ厳しい創造の闘いであること」の二面性を正しく捉え切れず、後者の、創造の厳しさだけを前者と切りはなして一方的に強調した処から生れました。

この三年「英とラッパ」の記録性をこえた「面白く良い芝居」をつくろうとして「春んだくれ」創作ととり組み、私達はいつか芸術主義、技術主義の陥落におちこんでいたのです。私達は本年「春んだくれ」を仕上げた段階で、おぞまき乍ら、他團体にも呼びかけ「い

（①）「部落解放の演劇をやることで部落解放運動をやっていくことになるのだろうか？」
　　この疑問の正しさと誤りは、だから
　　意識が不明確になってきたことへの鋭い指
　　摘として正しく

（②）「演劇か」「解放闘争か」の機械的二元
　　論におちこみ、私達の演劇は現在複雑な困
　　難に面している部落解放運動を正しく押し
　　すするためのなくてはならぬ武器であ
　　り、その為にこそ「いこら」の力量をもつ
　　ともっと強めねばならないという観点の弱
　　さに誤りがあつたのです。

（⑤）「いこら」でなければ出来ない芝居
　　サークルは専門劇団と比べて大変不利な点
　　と、反而大変有利な点があります。

勿論、経済的ないみでの、生活を賄けてい
　　らない处からくる中途半端さもありますが、例
　　えば稽古。専門劇団が一日五時間二〇日の稽
　　古日をとる所とします。それだけの練習量をと
　　るうと思えば「いこら」の場合週二日（月・
　　水）一日二時間の稽古ですから（その他に金
　　曜日は学習、運営会議、機関誌つくり）二十

— 23 —

趣味のグループから闘う集団へ

—上野市民劇場活動の記録—

杉森正美

上野市民劇場は総会の決定として、ちかく
東（又は西）リ演の加盟を実現することになりました。紹介をかねてこの記録を掲載します。

反面、私達は夫々の職場や地域で夫々の要求を結集して樹っており、自らの闘いを通じて生き生きした多彩な人民の生活とこれをつかんでいます。又、私たちは和歌山県有田郡という背後にみかん山、前景に紀伊水道を眺める農村地帯についてはどの専門劇団よりもくわしく知つており、人口一万七千のこの町の人々の生活の姿、要求ことば、顔の特長女性群などの名優よりも、よく知っています。

従つて、私たちは専門劇団の人々のように少くとも演劇サークル「いこら」が、専門劇団の舞台と同じものをつくろうと追従する限り、イミテーションか、ままごとめいた仕事しか出来ません。

この座談会は上野市民劇場（通称『劇団民劇』と云っている）の創立十五年目を記念するということもあり、『地域の演劇文化を、地域の労働者の要求に結合させ、広め、高めよう』という趣旨のもとに労演や地区労に呼ぶかけて、三十数名の若者が参加した。この集会では、劇団にとっても、劇団を支える地域の人々にも、今までの民劇の歩んだ道の正しさ、劇団をさらに強化し、地域の労働者階級との結びつきを強めなければならないこと、現在の状況の中での現実変革のための文化運動の重要性などが、あらためて認識させられた。

民劇は、昭和二十六年に、高校演劇部の卒業生たちがつくった『上野演劇グループ』を基礎にして、二十八年の秋に発足した。

上野市は、名古屋から国鉄関西本線を急行で西へ二時間、大阪から一時間余の四方を鉢巻山系で囲まれた、人口五万余の城下街で、

忍者の発生地と俳人芭蕉で知られている。今日では名阪高速道路の開通と工場誘致で、近代化が行なわれているが、当時は、ラジオや映画を除いては殆んど文化的な要求を満たすことができないような状態であった。

『市民に良い演劇を。市民の生活文化の向上を』と、ごく一般的なことが、劇団づくりの発想であり『市民のための劇団』として発足したのである。

上野市では、公民館が、新しく独立した機関として活動を始める同時に、民劇も公民館に事務局を置き、一応、社会教育団体に準じるものとして、公民館から補助金が交付されるようになつた。

当時の文化情勢は、全國的にも青年運動が最も、全国津々浦々にまき散らされた。上野市でも前進し、民主運動は大きな成果をおさめた。全国初の社会党公認市長を当選させた上野市には、市民劇場や合唱団が活躍し、公民館としても、サークルの育成に力を入れざる

五週（約半年）必要なわけです。しかし稽古には必ず、誰か欠け（残業、夜勤、組合など他の会議）職場へ入った途端にせりふなどをすっかり忘れてしまつし、くたくたで帰ると夕食を大急ぎで、かき込んで稽古場へ走りこむ（キミの場合はたべないで腹ペコのまま）わけですから才能の問題は除外して考えてもその舞台成果は想像がつくというものです。なお、そのため、病人も続出し、現在入院一名（事務局長）、胃炎五名、喘息二名といった状況です。

だから、少くとも、演劇サークル「いこら」が、専門劇団の舞台と同じものをつくろうと追従する限り、イミテーションか、ままごとめいた仕事しか出来ません。

反面、私達は夫々の職場や地域で夫々の要求を結集して樹っており、自らの闘いを通じて生き生きした多彩な人民の生活とこれをつかんでいます。又、私たちは和歌山県有田郡という背後にみかん山、前景に紀伊水道を眺める農村地帯についてはどの専門劇団よりもくわしく知つており、人口一万七千のこの町の人々の生活の姿、要求ことば、顔の特長女性群などの名優よりも、よく知っています。

従つて、私たちは専門劇団の人々のように

夕食を大急ぎで、かき込んで稽古場へ走りこむ（キミの場合はたべないで腹ペコのまま）わけですから才能の問題は除外して考えてもその舞台成果は想像がつくというものです。なお、そのため、病人も続出し、現在入院一名（事務局長）、胃炎五名、喘息二名といった状況です。

だから、少くとも、演劇サークル「いこら」が、専門劇団の舞台と同じものをつくろうと追従する限り、イミテーションか、ままごとめいた仕事しか出来ません。

反面、私達は夫々の職場や地域で夫々の要求を結集して樹っており、自らの闘いを通じて生き生きした多彩な人民の生活とこれをつかんでいます。又、私たちは和歌山県有田郡という背後にみかん山、前景に紀伊水道を眺める農村地帯についてはどの専門劇団よりもくわしく知つており、人口一万七千のこの町の人々の生活の姿、要求ことば、顔の特長女性群などの名優よりも、よく知っています。

従つて、私たちは専門劇団の人々のように

職場の労働者に学ぶため、現場へ入らなくても、どこかの闘争をみにゆかなくても済むわけですか。サークル員の「昂ちゃん」は自治労の書記長だし、「ガタayan」は地上百米の鉄骨の上を平気で歩くトビ職だし、「務たん」は長距離輸送のトラック運転手だし「ターチン」は電話の配線なら、見ないで故障がわかる技術者です。10・26闘争で処分されたものの怒りなら、「増さん」でも「貞さん」でも「タリちゃん」でもすぐぶちまけてくれます。

男女構成	
男	17
女	6
(3) 年令構成	
60才～	1
40才～	2
30才～	5
25才～29才	7
20才～24才	5
19才以下	3

(1) 職業構成	
農村労働者	1
店員	1
失業者	1
旅館業主	1
運送業	1
金融関係	1
修理工	1
中学生	1
小学生	2
教師	4
町議	1
地方公務員	2
主婦	1
トビ職	1
公社員	2
国鉄職員	1
病院勤務	2

有田演劇サークル「劇団・いこら」代表者（和歌山県湯浅町湯浅東南道）

×

×

×

×

なるだろう。『民劇と地域の労働者階級が、車の両輪の如く、がつちりと結び合ひ、支え合ひ、高め合ふことによつて、正しく市民の要求にこたえられるだろう。』と当時の報告に記されている。

劇団はその観点に立つて、可能な限り創造活動を展開した。少人数ながらも、アコーディオンとすこしの衣裳で歌と踊りを構成し、わらび座が残した成果に乗つて、約三年の月日を過した。

昭和三十九年、全国労演連絡会議の総会では、労働者の要求に合つた演劇運動を発展させることが現在もっとも急務であるとして、『強大な労演の結成』のアピールが採択された。民劇も、それにこたえて地域の自覚された活動家に呼びかけて、労演結成への準備活動を始めた。過去十年、地域での観客組織の必要性をうつたえ続け、『民劇を育てる会』が、民主的な市民の力で結成されていたが、それが労演の結成と結びつくなってしまった。山本安英とよどうの会が、解散公演として巡演した十一月が、労演の第一回例会となつた。

民劇も、それにこたえて地域の自覚された活動家に呼びかけて、労演結成への準備活動を始めた。過去十年、地域での観客組織の必要性をうつたえ続け、『民劇を育てる会』が、民主的な市民の力で結成されていたが、それが労演の結成と結びつくなってしまった。山本安英とよどうの会が、解散公演として巡演した十一月が、労演の第一回例会となつた。練習は八月にスタートし、組合の活動家が参加し、労働者の日常の闘いについて、あれこれ指摘し合い、具体的に要求を出し合つて進められた。

公演には、労働組合員や家庭の主婦、労演や労音の会員たちも多数参加し、終演後の座談会には、延べ一五〇名が参加した。

この協同劇場は、大きな反響を呼んだ。參加した人々の中から『労働者の闘う姿に感動した、第二回目が楽しみだ。『民劇は、このように地域の問題を上演するべく』もつと演技をみがけ』など卒業生意見が出され、全般的におどろかされた。

これまでの民劇の活動を総点検し、明確な方針を打ち出すための討議が始まった。方針を打ち出すための討議が始まつた。

『と』さらに、『労演の例会では上演できな

い、地域性のある、しかも、民劇しか上演できないような、地域の問題の劇化上演、地域の闘いの劇化等』について討議が進められた。

その結果、昭和四十二年の上半期は、文工隊活動を中心に、下半期を小公演を中心としたプログラムを、確認し合つた。

文工隊活動では、地域の闘いを創作するな

きで、そこに地域の闘いの典型を見出そう、との方針に従つて、『地区労赤旗びらき』『共産党赤旗まつり』『三・一五集会』の参加に始まり、全生連けつ起集会等、大胆にと

下期は、河十児作「盆踊り」に久しぶりに劇団の総力をあげとりこんだ。そしてそんでも、あらたな方向で創造活動を始めなければならなくなつて来る。

これは、『労演に組織されない人々のために、どう応えるか。特に、低賃金と労働強化で、

労演例会にさえ参加しなくてもできない人々への要求に応えるための活動を探り出すこと

と』さらに、『労演の例会では上演できな

い、地域性のある、しかも、民劇しか上演できないような、地域の問題の劇化上演、地域の闘いの劇化等』について討議が進められた。

その結果、昭和四十二年の上半期は、文工

隊活動を中心に、下半期を小公演を中心としたプログラムを、確認し合つた。

文工隊活動では、地域の闘いを創作するな

きで、そこに地域の闘いの典型を見出そう、

との方針に従つて、『地区労赤旗びらき』

『共産党赤旗まつり』『三・一五集会』の参

加に始まり、全生連けつ起集会等、大胆にと

下期は、河十児作「盆踊り」に久しぶりに劇団の総力をあげとりこんだ。そしてそ

れは、協同劇場公演という新しい試みの公演

劇として、あらたな活動が望まれて来る。そ

ばならなくなつて来る。

これまでの民劇の活動を総点検し、明確な方針を打ち出すための討議が始まった。

労演が結成され、活動が軌道に乗ると、民

関東ブロック演技ゼミナール報告

津 村 雪 雄

三月三日あさ十時から夕五時まで、国電大

井町駅にちかい浅間台小学校講堂で、よこは

ま青年座(四名)京浜協同劇団(九名)劇団

労芸(十七名)舞芸小劇場(五名)劇団協同

(三名)土の会(一名)青年劇場(二名)七

劇団四十名のなかが集まって、関東Bでは

じめての演技ゼミナールをひらきました。

演技ゼミのことは、月例のB会議で去年の

うちから話しあわれ、まず日頃の稽古を公開

し、そのあと皆で演技について討議しよ

うということでもたらわけですが、この日

実際、稽古したのは三劇団だけにおわりまし

た。

一番目はよこはま青年座で、体操を中心

発声をふくめた日常訓練。つぎに労芸が五月

公演、荒井敬亮作「蒼氓の宿」幕あきの荒立

ち(半立ち)稽古。最後に京浜協同劇団は黒

沢参吉作「巣ばなれ」をほぼ上演にちかい形

で発表し、おわって全体で意見交換がおこな

われました。

×

演技ゼミの有効なやり方は、まだ暗中模索

の状態であって、今回的方法もその意味では

一つの試みといえます。

「巣ばなれ」を名古屋市外電話局演劇部、名

古屋演集、京浜の三者が部分稽古と上演のの

ち、全体討議という形で実施しましたし、こ

の前後中部ブロックでも岐阜で、はぐるまが

「ベトナムの焰は消えない」、演集が「キニ

ーボラのある街」第三幕、でくのぼうの会が

「おばあさんと殺人と酒」をそれぞれ上演し

た上で、演技について話し合を全体でやりま

した。東北ブロックも去年、山形で、仙台小

劇場の「アンネの日記」を素材に演技中心の

勉強会がひらかれていました。

われわれの運動や組織をつめるための学

びあいに比して、否創作劇や演出上のそれに

評しあうという計画でした。

較べてさえ、演技の学びあいは、とくにこうしたゼミナールの形で何ほどの有効性をもつた、疑問をのこすほど難しいことです。しかし、難しさばかりを予測してしまうのでなしに、さしづめ相互につかみとれる収穫が小さいとしても、とにかく開墾にとりかからうといたところから、去年の秋のおわりごろ関東Bとしてこの企画はくずれ、最初に文工隊活動に使用可能な三〇分以内の劇を統一レバートリイに選んで、演出をふくめて各劇団の演技の特色がどうあらわれるかを観る、批評しあうという計画でした。

×

×

×

×

今日は、各劇団のスケジュールの折あいがつかないことと、統一レバにふさわしい作品がみつけられなかつたことで、断念したのですが、この計画はぜひ今後のゼミナールで活かしたいものです。演技者の劇内容の把握と表現のちがいが、若し自分だつたらどうするかーという観点で明確になりやすいところに

統一レバの魅力があります。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

(47ページよりつづく)

脚色者作間難二がいうように、それはドラマの鉱山である。壊つても壊つても尽きはしない。なのに、鉱脉は舞台のむこうに眠つて

いた。なぜ、どん欲に壊らないのか。

たしかにとばくちは壊られ、諸君の手にはいくつかの鉱石もある。しかし、そればかりで勝負していいのか。

とばくちを壊つて手に入れたいくつかの鉱

石で勝負するから、セリフが單調なウタにな

る、ひとり芝居が多くなる。説喚しないと説

得できず絶叫しないと憤れない、労働と生活

のリズムが喰きあげてこない。

かりに大島朋子のおりんをみよう。そこに

は残忍な三菱資本と家の搾取に耐え忍ぶ、哀

憐の日がとられたおりんはいる。しかし、焦

げたみてえな鉱石のにおいヨリ体にしみこま

せた——作者松田解子が、パンフに書いてい

る、『その心情の底にたたえていた地熱のよう

な熱さ』が充分おりんのものになつていな

いのである。もちろん、おりんだけのことを云

つてゐるのでない。

演技者の深い読みで、もうひとつ強調なド

ラマとなつた『おりん口伝』を、いつの日か

私は観たいともう。



青年劇場は昨夏の真夏の夜の夢につづくショーケースシアターの東京公演として、四月二〇日豊島公会堂において、十二夜を上演。

以後全国巡演を実施。

土の会では、V・ローラン作初

恋を山村金平演出で、五月二十四・

なお秋には、こばやしひるし作書

けない黒板を予定。

三五日の豊島公会堂で上演する。

八戸の各市民会館で上演。

弘前演劇研究会第四回公演は、

松田解子原作・作間雄二脚色演出

おりん口伝。これは青春県労演の

第一回特別例会として、四月一九

日弘前、二〇日青森、二一日

仙台小劇場は五月二十四日市公会

堂で、こばやしひるし作ウエトナ

ムの焰は消えないと小関智弘他合

作のピカの蔭からで小公演。又秋

には早船ちよ原作・作間雄二脚色

キュー・ボラのある街で第四回公演

の予定。

仙台小劇場は五月二十四日市公会

堂で、こばやしひるし作ウエトナ

ムの焰は消えないと小関智弘他合

作のピカの蔭からで小公演。又秋

には早船ちよ原作・作間雄二脚色

キュー・ボラのある街で第四回公演

の予定。

仙台小劇場は五月二十四日市公会

堂で、こばやしひるし作ウエトナ

ムの焰は消えないと小関智弘他合

作のピカの蔭からで小公演。又秋

には早船ちよ原作・作間雄二脚色

キュー・ボラのある街で第四回公演

の予定。

劇評

札幌公演について

桂 恵 美

一幕二場の舞踊のような構成と、それにか

らまる間のびした郡上節の対比や、定次郎の「唐丸籠」をむかえる百姓たちの迫力、そしてさらに、乾いた表すの音をリズムに無言劇にとって未開拓の分野でもあり鮮やかな印象と深い感動を与えて呉れた。

「百姓」（作こばやし・ひるし）の上演は、北海道演劇にとって、矢張り画期的な事業であったといえるだろう。地方劇團が一様に指導者や役者の不備や不足を理由に、中央の再現的な意味での舞台創造に甘んじなければならない中にあって、道演集の中核的な二劇團が、その合同公演によってなんとかして自からの「ワク」を打破ろうとする試みだったからである。

舞台は、きわめて「ティイネイ」な演出によつて闘いにたちあがる百姓の群像と、それからまる武士や庄屋などの階級を、検見取にしたといえるだろう。ところが、この成功をおさめたことを、まずとりあげな

このスケールの大きい戯曲を上演するうえで、とくに全体と部分の関連、その一つ一つの焦点を明きいかにすることは不可欠の条件であり、観客を最後までひっぱつてゆく息の長い総合力が要求されるわけだが、この面ががどんなものだろう。それは闘いと民衆がつき動かし、自らの指導者を押し出してくる必然的な過程としての把握の不十分さからきてゐるのではないかと思う。

崎労働会館。別班は六月二日同じく労働会館で、浅見祐治作・横田治演出メコン・デルタ上演、このひるし演出夕鶴同時に宇野重吉の作品で県内巡演の計画。また選挙作品で県内巡演の計画。また選挙

戦の文工隊も活動を開始。

日記を、七月、九月には三月の人

を食った話に続き稽古場での小劇

記念講演。また六月二二、二三日

にいるがね、川口市民劇場等の仲

間は県南演劇集団という形で共同

活動を続けてきたが、一月一四日

合間で、ゴリギー作・梨地四郎、

宇都宮裏裏演出どん底を、五月一

八、一九日横浜スカイ劇場で上演。

劇団協同は四月二〇日、国分寺

公民館で、小関智弘他合作ピカの

亮作・萩坂桃彦演出蒼鶻の宿で、

五月一〇・一一日の品川公会堂に

おいて上演。

劇団協同は四月二〇日、国分寺

公民館で、小関智弘他合作ピカの

亮作・萩坂桃彦演出蒼鶻の宿で、

五月一〇・一一日の品川公会堂に

おいて上演。

名古屋演劇集団は、明日を紡ぐ

娘たちの伊那、諏訪公演で大きい

成果をおさめ、現在五月公演こば

やしひるし作・若尾正也演出山櫻の

木に集中している。

船天佑丸を六月二〇一二三日に川

を記念して四月二一日、祝賀会と

西リ演の今年度総会は、八月

三、四日福岡でひらかれる。この

機会に、福岡現代劇場によるアラ

ルコン作三角帽子を上演。

弘前演研作間雄二脚色のおりん

口伝は、今秋関西芸術座の上演が

決定、他に静芸、名古屋演劇、福

岡現代劇場なども上演を計画中。

西リ演の今年度総会は、八月

三、四日福岡でひらかれる。この

機会に、福岡現代劇場によるアラ

ルコン作三角帽子を上演。

テレビや映画を毎日みている観客の側から

記念公演を岐阜市民会館でおこな

う。公演は木下順二作・こばやし



劇評

札幌公演について

桂 恵 美

一幕二場の舞踊のような構成と、それにか

らまる間のびした郡上節の対比や、定次郎の「唐丸籠」をむかえる百姓たちの迫力、そしてさらに、乾いた表すの音をリズムに無言劇にとって未開拓の分野でもあり鮮やかな印象と深い感動を与えて呉れた。

「百姓」（作こばやし・ひるし）の上演は、北海道演劇にとって、矢張り画期的な事業であったといえるだろう。地方劇團が一様に指導者や役者の不備や不足を理由に、中央の再現的な意味での舞台創造に甘んじなければならないの中にあって、道演集の中核的な二劇團が、その合同公演によってなんとかして自からの「ワク」を打破ろうとする試みだったからである。

舞台は、きわめて「ティイネイ」な演出によつて闘いにたちあがる百姓の群像と、それからまる武士や庄屋などの階級を、検見取にしたといえるだろう。ところが、この成功をおさめたことを、まずとりあげな

このスケールの大きい戯曲を上演するうえで、とくに全体と部分の関連、その一つ一つの焦点を明きいかにすることは不可欠の条件であり、観客を最後までひっぱつてゆく息の長い総合力が要求されるわけだが、この面ががどんなものだろう。それは闘いと民衆がつき動かし、自らの指導者を押し出してくる必然的な過程としての把握の不十分さからきてゐるのではないかと思う。

「でつち上げ」を観て思つたまま　岡崎芳三

意外でした。もっとリアルな幕切れを期待していたのでした。

どうも劇を観るのは苦手なので、「でつち上げ」を観るのも実のところ気がすすまなかつた。しかし、人事闘争の一環といわれ、われわれ小中教組の組合員にかけられた一〇・二一闘争の攻撃に材をとった劇、しかも尊敬している沢田さんの作品と、二重三重の縁があるので早くから見て観ました。

ひと口で云えばグングン劇中に引き入れら

す。それからもう一つ、あの幕れはちょっと

劇評

足ぶみから新たな昂揚へ　かわだ・りょうじ

—京浜協同劇団「おふくろの歌」

(鋼管・川鉄)

十余年ぶりに「日鋼室蘭」が「おふくろの歌」と名前をかえて再演され、ここ何年来、マネリになつたいたい京浜協同劇団の舞台と観客の間に、新鮮な劇的感動がよぎり、観客からの拍手と支えが、年を越えて二日間の再演を成功させる力となつたのであつた。

今度の公演は、京浜協同劇団の発展の歩み



そういう特徴をもつてゐるといえよう。

そして、作者と題材と戯曲の関係でいえば、黒沢参吉が「日鋼室蘭」を書いた昭和三十年代初め頃の方が、素材である斗争そのものも、作者の戯曲制作の情熱も、より真剣で熱気がこめられていたと思うのだ。その後十数

れて、登場人物の一人になつたような気もちでした。たとえば分会長の校長交渉の場など、実にうまいこと云つたなあ、などと考え、しかしわれわれのやつてはいる校長交渉では、もつと多勢がおしかけるのになあ、劇だからあやるしかしようがないのかなあ。とちょつと

と変におもつたりしたことも今おもいだしま

す。それからもう一つ、あの幕れはちょっと

ずぶの素人の的はずれかもしれません、お世辞ぬきでこれまで観た(と云つても、そ多くは観ていませんが)劇の中で一番よかったです。終った瞬間、ああみてよかつた、しかしわれわれのやつてはいる校長交渉では、もみじみおもい、『ありがとうございました、こんな良い劇をあれ一日限りでやめるのが惜しいな』と、今でも思っています。

(京都市中学校教職員組合)

年の作者の作品歴をみると、戯曲の味いにおいては「炉あかり」、戦後の自分の生き方への反省としては「生れた家」、ライフ・ワークの夢として「真土村一揆」、技巧的なうまさとしては「俺たちの夜」などと数々の特徴があげられるが、一年に一本から二本の新作をという劇団からの要請は、一貫して階級的な題材をえらびながらも、ややマンネリズムになり、折角の題材から血肉の気が薄らぎ、技巧で補う弱さをはらみがちだったと思う。黒沢自身の職場経験のなさと彼を支える劇団体制も一因して、積極的に現場に立入つて、階級的な問題に取組んでも、家における親と子という黒沢内部の戯曲構造の方に重点をおきがちになる傾向があつた。この「おふくろの歌」では、日鋼室蘭の斗いを支えた沖野家における理解ある母親と三人の子供たちであり、この人物構図は、「渠ばなれ」「俺たちの夜」「生れた家」「金魚修羅記」に使われ、

「真土村一揆」では、村落における親子關係の地主と小百姓の形で再現している。

小林ひろしにおいては、親と子の關係が新旧思想の埋めることでのきぬ対立であり、民衆的次元では、立百姓と寝百姓の相剋であつた。ここに彼における戦後体験と組織體験の

介在をしができるが、黒沢参吉においては、抱擁力ある親と家を出てゆく進歩的運動をする子供の關係であり、両者は親子の情と庶民的感情が接点となつてゐる。黒沢戯曲により質的変化を望むとするなら、家と家における親と子の關係が、巨視的な階級的な關係においてはどうなのかということが問い合わせられる。取材した題材を、作者内部の「家における親と子」の発想に敷直し、既成技法なり、黒沢流のブレヒトなどから学んだ手法により劇化構造の変革が要求されるであろう。

次に劇団内部の問題にふれていえば、この「おふくろの歌」公演の一番の特徴が、今迄幾つかの業績を示した郡山勝利演出から、細田寿郎演出に移つたことである。郡山演出については、抱擁力ある親と家を出てゆく進歩的運動をする子供の關係であり、両者は親子の情と庶民的感情が接点となつてゐる。黒沢戯曲により質的変化を望むとするなら、家と家における親と子の關係が、巨視的な階級的な關係においてはどうなのかということが問い合わせられる。取材した題材を、作者内部の「家における親と子」の発想に敷直し、既成技法なり、黒沢流のブレヒトなどから学んだ手法により劇化構造の変革が要求されるであろう。

は、理知的側面の冷たさが先行し、黒沢戯曲が手を抜けた多方面の題材を扱うには長所を發揮したが、彼の演出では舞台における劇団員の生活感は萎縮されがちではなかつた。この「おふくろの歌」の舞台への役者の

熱氣と生活感は、他に多くの要因があるにせよ、細田演出の労働者感覺を底にたたえた人間力は、この時代の多種多様のものである。

間的なあたたかみの影響と思ひるのである。

に大きな役割を果してゐるといえよう。沖野すずを演じた酒井今子は、数年前の抒情的モダニズムのかつた歌うようなせりふ使いは影を薄め、大きく成長したし、中沢研郎は腰をすえ、井上香は持味を生かしきり、滝健司らの若手の台頭も特筆されてよい、そして、劇団「労芸」の参加も変った特色をもちながらアンサンブルを生かしていた。

「ワツサ・ジエレズノーワ」

萩坂桃彦

ゴーリキイは、同じ題名のこの戯曲を、一九一〇年と一九三五年に書いている。それは一人の作家がその作品を、より完成したものにするために、推波、改稿したというのではなく、一寸事情がちがうようである。戯曲を通してのゴーリキイの思想が、革命の前と後として

で、かつきりと色分けできるとすれば、それにそくした思想の表現として、たまたま同じ素材に托して、むしろ二つの戯曲を書いたと云えそうである。だから、その二つを比べてどちらが良い、悪いということは、さして意味がない。

ある。この時期に全劇曲の大半が発表されてゐる訳だが、その頃のゴーリキーの仕事を特徴づけることは、今のぼくの手には負えないが、ひと言でいえば、帝制ロシアの末期における貴族階級の没落に続いて、新しく起つた、ブルジョアジイや、小市民、商人階級の躍進とその矛盾の暴落、崩壊を目前にした彼らのむきだしの人間像を描くことへの、どんな意欲だった、と云えはしないか。

コレフノーレ（細川ちか子）という一人の母親の芝居である。

二人の頼りにならない息子を抱え、夫は今日明日にも死のうとしている。三十五年続けて来た事業——泥炭を扱う回漕業のような感じだった——をかの女はまわり抜く。その事業の破綻をふせぐためには、手段をえらばなかつたと云つていい。夫の弟プローホル（下条正己）は、事業の出資に片棒かついている

ただ、ここでやはり云つておかなればならないのは、革命の展望を踏まえた科学的な論理で、ゴーリキイは、それを書いたとは云えなくて、根底にあるのは、強烈なヒューマニズムをともなつた、芸術上のレアリストだったということである。

のだが、それがいま、元利をそろえて、ひき上げようとしている。これは手痛い。もし、この男がいなかつたらというのは、ワツサの思ふくだったろう。このワツサの思ふくを忠実に実行するのが支配人のミハーヨイロ（松下達夫）である。ミハーヨイロは下働きのリーパ

民芸が、そういう時期の作品「ワツサ・ジエレズノーワ」を、日本初演のかたちで、ぼくらに見せてくれたことはありがたかった。しかし、それが十分納得のいくようなものとして上演されたかどうかは別のことである。ぼくは、疑義があるのだ。それは演出（菅原卓）にあるのだ。一九一〇年、ゴーリキイはこの戯曲の出版にあたって「母の戯曲を書きました」と人に書いて送っている。そうだが、たしかに、これは文字通り、ワツサ・ジエレズノーワ」を、日本初演のかたちで、ぼくらに見せてくれたことはありがたかった。しかし、それが十分納得のいくようなものとして上演されたかどうかは別のことである。ぼくは、疑義があるのだ。それは演出（菅原卓）にあるのだ。一九一〇年、ゴーリキイはこの戯曲の出版にあたって「母の戯曲を書きました」と人に書いて送っている。そうだが、たしかに、これは文字通り、ワツサ・ジエレズノーワ」を、日本初演のかたちで、ぼくらに見せてくれたことはありがたかった。しかし、それが十分納得のいくようなものとして上演されたかどうかは別のことである。

(河内真沙子) を騙して、プローホルに毒をもらせる。(プローホルは心悸亢進の安定剤のようなものと精力増強の、二種類の薬を常用しているが、その調合の分量をあやまたせる)。これがしくじると、息子の、弟の方のパーソエル(石森武雄)を嘆かして、争わせ、のぞみを達するのだ。(ショック死する)。

勤らく大衆と共にある劇団とか労働者演劇
という名前に甘えてはならない。今まで、
京浜協同劇團を支える人々の中で、劇団員の
興意や方向はわかるが、芝居をみると硬い理
くつばかりでつまらない、演技も何人かを除
いて類型で素人くさい、良かつたからと劇団
の職場の人をさうのにためらいを感じると
いう意見があり、劇団側の意欲と支持者の間
に、口にでにくい溝ができつたといえ
よう。五九年の創立から六三年の「北方の記

と云つて、むろん、無関係ではないわけで

一九一〇年の「ワッサ」が、二十五年後にもう一度書かれるという事情は、既に、一九二

民芸の舞台は、どうやら一九三五年の第二

ワリアントを思わずから外して、もっぱら、一九一〇年の「ワッサ」にまるごとよりかかつた観があった。

ちなみに、「一九一〇年といえば、「どん底」「太陽の子」「敵」「最後の人々」と書きつけてきたゴーリキイ戯曲の、ピータクの時で

たたずの男どもを追い出し、復心の娘アンナ（小夜福音）と、ペーヴェルの妻リュドミラ（三条泰子）にのぞみを拵するのである。こう書くと、いかにも単純な筋書きになってしまふが、ワツサのような強靭な性格が生れるべくて生れる土壤のようなものは、ゴーリキイによって濃密に描かれ、それが先に云つた、小市民・ブルジョア階級の諸矛盾と窮境に、どんなにメスを入れる、ということと見合つてゐる。

ワツサ一家は、まさに、欲望と、憎悪と、猜疑の修羅場だ。

父の遺産目あてだけで待機する長男セミヨーン（水谷貞雄）と商家出の妻ナターリヤ（藤美和）。このセミヨーンは労働意欲は全くなく、ひたすら、貴金属商の店をもつ、バラ色の夢を追っている。彼は妻の指図で、遺産にありつけた時機を狙って、うろついていいふる。この二人の表現は、なかなか良い。（）ここで、セミヨーンが、女中のリーバに子どもを生ませたことあることも、つけ加えておこう。

弟のパー・ヴェルは、実は腰がひん曲つていいのである。五才の時の発病というから、今様でいえば、小兒マヒでももあつたるうか、

彼のからだが歪んでいるように、その心も損

われている。というのは、彼の妻リュドミラは、母親のワツサのはからいで、支配人が提供したものである。リュドミーラは支配人

ミハイーロの娘なのだ。このいきさつにもミハイーロの強かな自算がかくされていよう

いうものである。松下達夫の演技は、その表情を表現しきれていない。この俳優持前の女は若くて美しい。パーゲルから逃げ廻

ることが、かの女の仕事である。追いかける

パーゲルの不自由な歩き方が見ものである。殺される仕儀になったプローホルも、町にかくし児を持つ放蕩児である。ワツサによ

りや下心を宿しているようだ。

こう見てくると、この戯曲の中で、まともな人間というと、下働きのリーパー一人位のものだ。それすら、かの女はセミヨーンに生まれた子どもをわが手にかけて殺しているし、その罪のつぐないを口実に、ミハイーロの策略に堕入るのである。プローホルに毒を

ばれて嫁ぎ先きから戻つて来て、この渦中に

入るアンナも、どうやら、口に出せない、弱

て、破滅の自殺である。

『おりん姉さが、この荒川鉱山の東畠組の家さ、和田千治郎さんの嫁コに来てから、もう一年近くになりあんした……』

『おりん口伝』の幕あきである。

それにして、何という美しい言葉だらう、生きている日本語だろう。

おおげさに云えば、正味四時間私は体ごと秋田方言の婆婆に酔つていた。

弘前演劇研究会が、作間雄二が奔放に泳いだのは、民族のたかいと民族の言葉を川床に揺すりながらうねり流れた。その水であつた。働く人間がふるさと根をはり、かりに厭うもののすらもかかえて遂には愛してしまようによふるさとを愛し、そこから他ならぬ舞台をつくっていく——そのことのかげがえなさ、たしかさを改めて教えてくれたという点で、ここからのお札を私は云う。

仙台の姫かまぼこを、川崎のデパートで買つてくることがこの頃はできる。

演出者、作間雄二是、演技者にむかって

劇評

弘前演研の『おりん口伝』

黒沢参考

『本を読み、本を読み』と、口が酸っぱくなる程云つたにちがいない。

やはり本が読めていない。充分満足はできなかつた——という中には、たとえばテープに入れた南部からめ節の粗末さ、(総じて効果は弱い)幕処理の拙さ、(とくに各幕あきのナレーションのおわりから本舞台への移行の拙さは歎きしりさせる)衣裳(ことに若い女性)の生活感の欠乏、装置の構造上の無理と製作上の材質や色彩からくる平板さ甘さなどが、原因としてあげられる。

別の劇団の幕あきで、あの『もう一年近くになりあんした……』をききたくない。それが、石井木実ほどに美しく語られなかつたら辛いだろうし、もっと美しく語られたら更に辛いだろう、とおもう。世の中を変えたら、う)などのがのこる。あれ以上瘦せることがで

さ、脚色の文体のリズムを舞台のリズムに転化させる方法の未開拓(最低三時間で上演する)ことが、舞台内容の観点で絶対必要だらう)などのがのこる。あれ以上瘦せることがで

また、演出上の問題として(舞台監督の進行上の責任もくめて)全體のテンポの乏しさが問題にされなければならない。

脚色『おりん口伝』はすぐれた戯曲だ。

(37 ページ下段につづく)

盛ったあとは、かの女の單独犯に仕立てられ

て、破滅の自殺である。

こういういきさつをワツサは冷酷に見すごしてゆく。このへんの、心の動搖に耐えて、書いたのだったかも知れぬが、しかし、ゴードミーラは、何ともがまんができない。か

ナチュラルな味も、ここでは役に立っていない。ところで、この不眞者に嫁がされたたり

ヨードミーラは、何ともがまんができない。かの女は若くて美しい。パーゲルから逃げ廻

る。殺される仕儀になったプローホルも、町にかくし児を持つ放蕩児である。ワツサによ

り、ゴーリキイは興味以上に作家的な愛情をもつて書いたのだったかも知れぬが、しかし、ゴードミーラは、何ともがまんができない。かの女は若くて美しい。パーゲルから逃げ廻

る。殺される仕儀になったプローホルも、町にかくし児を持つ放蕩児である。ワツサによ

てそれから十五日程して、再見したときに、は、ようやく、ワツサの未来が、閉ざされた印象として出ていた。この迷いは、ぼくは基本的な、ワツサに対する踏まえ方の不確かさだと見る。くどく云うが、ワツサはつきはなされしかるべきである。かの女の瓦解が音か。そこに心情的な何かが働いたんだろうかとすると、ぼくは否定したいのだ。

民芸の舞台は、そのワツサに、何かを押し付けて見てほしいめんを、観客にもとめたのである。

ゴーリキイが、その幕をおろすと同時に、はつきりとたち切つたと思われるものを、芸の演出は、あとをひかせたのである。

ものでした。

多數意見としてまとめられた報告草案が提案されました。草案は、西リ演の創立理念である「現実変革をめざすアリズム演劇」という立場について、われわれのいう『現実変革』とは、人民の解放をめざす労働者農民に依拠した階級的立場での一致点を前提にしたものであり、今日の人民解放の道としての統一戦線の思想を演劇実践のよりどころとしてきたこと。わけても私たちの運動は具体的な舞台創造をもって統一戦線の運動の中核的役割を果そうとすることにあること。西リ演の歴史は、この創造の思想と実践を、労働者を中心とした人民大衆の中でたしかめ深めひろげていく歴史であつたし現在もそれが中心的課題であることをあらためて提起しました。そして、「演劇戦線の危機」にあたつて全演劇人に訴える」の檄文に代表される劇団はぐるま座の運動路線は、このような西リ演の方針とは全く相入れないというのが運営委員会の多數意見であり、総会の討議によつて西リ演としての統一した態度を探求することを求めました。

総会には、はぐるま座を除く運営委員会の多數意見としてまとめられた報告草案が提案されました。草案は、西リ演の創立理念である「現実変革をめざすアリズム演劇」という立場について、われわれのいう「現実変革」とは、人民の解放をめざす労働者農民に依拠した階級的立場での一致点を前提としたものであり、今日の人民解放の道としての統一戦線の思想を演劇実践のよりどころとしてきたこと。わけても、私たちの運動は具体的な舞台創造をもつて統一戦線の運動の中心的な役割を果そうとすることにあること。西リ演の歴史は、この創造の思想と実践を、労働者を中心とした人民大衆の中でたしかめ深めひろげていく歴史であつたし現在もそれが中心的であります。そして、「演劇戦線の危機にあたって全演劇人に訴える」の激文に代表される劇団はぐるま座の運動路線は、このような西リ演の方針とは全く相入れないというのが運営委員会の多數意見であり、総会の討議によって西リ演としての統一した態度を探求することを求めました。

の無責任な分裂行動を追及されるや、はぐるま座の日笠代表は、次のように言ひ訳ともつかぬ答をして、あくまで自分たちこそ西リ演劇補強の新たな支柱となりはじめているとう表現は、なにも新劇全体を攻撃しているのではない。これは宮本修正主義團が日本の演劇運動に与えている害毒、その責任を追及するものが本旨だ。(2)、民主的な觀客組織は量を競うだけで……といつてるのは、労演を否定しているのではない。労演を現在指導しているのは自共であり、自共の指導下にある限り駄目だということだ。(3)、反帝反修羅争論というのは、なにも西リ演の現状規定と矛盾していないとは思わない。我々は今でも反帝反獨占の闘いが基礎だと思っている。しかし反帝反帝反独占の闘いは、日中團結、社会主義のとりで中国を守ることなしに闘えない」

そして、「労農の立場に自らを移しかえるために農村に入り、訪中公演で革命的英雄像を如何に描くかを学んできた」と、手柄顔にて述べました。

くか、現状打破の立場でどう英雄を描くかと
いう課題は西リ演の中でもまだ果されていない
最初は現実変革をめざす創造方法がはつきり
せぬままに西リ演に結集した。運動が進むに
つれて、日共を修正主義とみるかどうかで意
見が分れたのは、一が二になつていつたこと
で、これを発展とみずには、二になつたものを
すっぱり分けてしまうのはよくない。長い時
間をかけて論議をかわそう」と發言し、闇芸
としては幹事会で一般報告草案に態度保留の
立場を決めてきていると述べました。

この岩田前議長の発言は会場の大きな噴激
をよびました。一般報告草案は当日会場では
じめて各劇団代表に手渡されたものです。勿
論運営委員会はあらかじめ草稿を討議しまし
たが、総会としては各劇団代表が劇団の意見
を背負って態度を決める責任をもつて集まっ
ているのです。それを闇芸だけが保留の態度
をあらかじめ決めてくるとは、こうした重要
な問題についての総意を幹事会決定で拘束す
るものだという激しい意見が、闇芸の内部か
らも次々と出ました。

されているか、あるいは、はぐるま座が好んで口にする、『労農の立場に自分をおきかえ』といふことが、直ちに毛沢東思想を世界唯一の絶対的理論と結びつけられ、困難な条件と陰路を、すべて共産党的指導の責任に歸して自分だけがわかつた顔をしているような、そうした卑細胞の割り切りかたで私たちの道が切り開かれるものでないことは、各劇團の地道な活動の報告と討議の中であまりにもはつきりと示されていきました。

京都の人間座と劇團京芸の二専門劇團は、現在西リ演の中でもっとも先進的なブロック活動を展開していますが、かつて第三回総会一一九六四年頃までは、積み重なる劇團内の矛盾や財政的な危機で思うように劇團活動も

芸のはじめたのは、ます、充分な劇團態勢をもつてのスタンダード公演だけが前進の道ではないと、「天満のとらやん」や、国鉄職業作家の一暮芝居をもって、観客の要求がある限りどんなところにも入っていく活動をはじめました。京芸はそこから展望をうみだしていきました。そして、片方では京都でのサークル活動をもう一度掘り起していくために、「働く者の演劇教室」をはじめました。あるいは全員首切りになつた金印総連京都小川分会のたたかいを作品にした「テントからの報告書」を労働者と共につくりあげていく活動でした。そこから今日の水々しい舞台と情熱的な普及

「劇団の存在と伝統を守っていく」ということで、劇団京芸の藤澤さんが、重苦しい顔で、
「できない状態にありました。当時第三回公演会
とだけで頑張ってきたし、今も精いっぱい頑
張っているつもりだが、これではまるで、に
んじんを鼻先にぶらさげて歩く馬のようなも
んだと思うことがある」と発言していたのを
印象的に記憶しています。人間座の場合も四
五人の劇団員で、はたからどう見ても「そ
れで劇団を維持していくのんか」と口にだす

活動のいとぐちをつかんでいたのです。
人間座は、数少ない劇団員の限界を逆に生み出したとして、戦争がふみつぶしていくたあととの「生き残った人々の物語り」というテーマをしきりに追求しつづける創作劇運動をはじめていました。そしてこれまでに三本の創作劇を上演ましたし、この一年間に一万人の観客にむかっていったそうです。

顧客の中にもちこんでいくその姿に、はじめて専門劇団としてのありかたをみたし、業金も専門もただひとつ、明日をかえていく芝居で奉仕する道で固く結ばれている東西両り演の意味を知らされた思いがしました。

そして、京都では毎週一回の金曜劇場を府と共に催し、月六万円の宣伝費を府がもち、へき地への移動劇場に年間百八十万円の予算をきんでいるという報告に、思わずため息をつきながら、革新府市政を産みだした京都の民主勢力の力、その情勢が新劇運動に与えていた限りない激励、そこで両劇団を中心とした関西新劇人の会京都支部や、京都勤労者文化

くか、現状打破の立場でどう英雄を描くかと
いう課題は西リ演の中でもまだ果されていない
最初は現実変革をめざす創造方法がはつきり
せぬままに西リ演に結集した。運動が進むに
つれて、日共を修正主義とみるかどうかで意
見が分れたのは、一が二になつていつたこと
で、これを発展とみずには、二になつたものを
すっぱり分けてしまうのはよくない。長い時
間をかけて論議をかわそう」と發言し、闇芸
としては幹事会で一般報告草案に態度保留の
立場を決めてきていると述べました。

この岩田前議長の発言は会場の大きな噴激
をよびました。一般報告草案は当日会場では
じめて各劇団代表に手渡されたものです。勿
論運営委員会はあらかじめ草稿を討議しまし
たが、総会としては各劇団代表が劇団の意見
を背負って態度を決める責任をもつて集まっ
ているのです。それを闇芸だけが保留の態度
をあらかじめ決めてくるとは、こうした重要
な問題についての総意を幹事会決定で拘束す
るものだという激しい意見が、闇芸の内部か
らも次々と出ました。

もつたと報告しています。そして「統一戦線における自主文化の創造と普及」の旗印による思潮統一とともに、「演劇的力質の向上」

をあげる中で劇団の報告していました。

私は、これら関西勢の報告を聞きながら、

「東大阪争議団物語」の創作にとりくんでいます。この報告の中で、集団内の演劇運動家としての定着化をかちとっていること、それは統一戦線とその指導部隊としての日本共産党の文化政策の深まりの中できそかちとてこれたものだ、ということを強調していまし

を転々とするし、劇団員が次々と結婚して育児や就職などの条件が一時に重なりながらも、「ろんじゅいごう」、「陸橋」の公演に全力

△演劇會議▽

第九號 二八月發行

東リ演の機関誌として発足した本誌は、次
の第九号から、西リ演との合同編集発行にき
りかえる体制をととのえました。これによつ
て、わが国の側くものの立場にたつ演劇運動

るま座の行動・歴史を指針としながら活動していたところです。福岡現代劇場の代表が発言したように、はぐるま座の問題は全くひとことではない。自分たちの体内に深く入りこんだ瞼をえぐりだす問題であったのです。

てきた『ブレヒト張り』（ブレヒト張りといふ言葉は私の感じだけかも知れません。間違つていたら勘弁して下さい）の創造方法を、他の劇団とは相入れない創造路線として周囲をみてきたその態度からは、地域での民主的な共同行動としては他のサークルや劇団との連帶行動をとれども、創造的な提携、西リ演の推動によって日俄のまことに反対するよ

害について報告していました。「少農の立場に自らを移しかえる」と、眼をむきつぱきをとばしながら演説をぶつはぐる主席は、一体労農からなにをどう学ぼうとしたのか。自分たちの方であらかじめひとつパクーンをつくりあげ、そこを基準にしてあらゆるものをおみ、観客の意見を聞くような顔はみせても実は自分の都合の良いようにしか聞いていない

かつていついた南大阪劇研の、ニコニコと語りかける女性代表者の報告、働く人たちの要求と感情を劇団の創造と一緒にのものにしていく普及と一体になつた創造を、小型作品の運用と劇場公演の統一的な追求の中ですづけ、西日本の業余劇団での中心的存在となつてゐる劇団未来の活動……、このように、関西の諸劇团の眼をみはるような活動は、どれもこれも大衆のふところ深く入っていく普及の中から創造の生命を汲みだそうとする姿勢に裏打ちされたものばかりでした。

に出てこれなかつた四国・松山のこじか座、長く連絡の途絶えている岡山新劇場、組織の拡大も全く頭打ちしている広島・山口・九州……ここにも劇団はぐるま座のもたらした教条主義動脈硬化症？ の根深い病根を思わずにはおれなかつたのです。

私たちの活動の停滞の責任と原因を、なにかもかも「はぐるま座問題」におしかぶせてしまおうというではありません。しかし、広島・山口・松山・福岡などは、大なり小なりはぐるま座に大きな理論的影響を受け、はぐるまの支持の中で一日も早く隔月刊への発展を

の報開紙はさわざい音楽をもつて、音楽に展開したとおもいます。

内容については、全体の半分を中心論文、なかまの活動報告、記録紹介資料、舞台と戯曲評などにおき、半分を上演に適した戯曲作品に割くこととし、これは八月はじめ発行の第九号から具体化する筈です。

本誌は当面、年四回発行（一〇号）一〇月一一号（来年一月）のたてまえですが、なか

このままのままで一日も早く月刊への登録を
からちとりたいと考えて、います。
そのため、皆さんの力で直接購読者を増加
して、本誌の発行体制を守ってください。直
接購読の場合、添付の申込書に必要項目記
入の上、一部一五〇円（手三五円）または一
年分六〇〇円（送料発行所負担）をそえて送
ってください。尚僅かですが「東リ演」のバ
ックナンバーもご注文に応じます。

そのごく慢な態度からは、働く人のどんな生活からもなにひとつ学べなかつたであるうことは、たとえば広島の「働くものの演劇教室」ではじめて演劇を学ぼうとあつまつてゐる人たちを前に、いきなりはぐるま座の総会の「演劇総括」などをもちこんだり、あるいは「冬の旅」の京浜公演で、協同劇団の仲間からだされた率直な批判を「あの人たちは専門俳優である私たちよりも自分らの方がうまい」と思つてゐる」とかげ口を聞く風にしかうけとつていなかつたことや、今日では毛沢東思想宣伝隊としてしか文工隊活動をみていない

その行動のひとつひとつにはっきりと立証されています。この、はぐるま庭の今日から過去をさかのぼって考えてみると、中・四国・九州ブロックでの停滞とあわせてみて、私たちの中にも、知らず知らずのうちに「自分の尺度をきめて」大衆の意見をはからうとする姿勢が、根深くしのびこんではいなかつたかということを本当に考えさせられたのです。

そうしたことを考えていた私にとって、重々のしかかつてきた発言、それは会場全体を感動に包みこんだ、和歌山県有田の劇団「いのち」の発言でした。「労働者、農民に学ぶから」の発言でした。

「労働者、農民に学ぶ」というが、一体なにを学ぶのか、良い芝居を

各劇団は、その生き生きとした実践報告をもとに、運営委員会の一般報告草案を支持し、劇団はぐるま座の反省と激文の撤回がない限りこれ以上はぐるま座といっしょにやっていくことはできないという発言を、次々と発言しました。そして、運営委員会提案をさらに厳しく明確に規定した劇団四紀会の修正案がだされました。「私たちは西リ演の方針として、アメリカ帝国主義と日本独占資本が、今日のわが国を支配しており、私たちのめざす演劇はこの支配を打倒する政治的・社会的行動と切り離すことができないとの立場をとってきた。しかし、はぐるま座の激文では、

「反常反修を貫ぬく演劇戦線に結集しよう」

といふことが、『共同の闘い』として呼びかけられており、この主張の中では日本独占資本が敵としてとらえられないばかりか、かわりに革新政党のひとつとして客観的評価を得てゐる日本共産党が帝国主義と同列におかれ打倒の対象としてとらえられている。こういふ呼びかけは、西リ演の運動とは相入れない分裂主義的なものといわざるを得ない」

全く総会から孤立しきつたことを知つたはぐるま座の二代表が、自ら退場してしまったあと、この修正案を含む一般報告草案は、開芸の保留を除く全劇団の賛成で採択されました。開芸の保留という態度は、百人以上の劇団員をかかえ、関西のマスコミの激流とたかいつながら舞台創造を生命として守つていこうとしているこの劇団の複雑な立場を、あらはぐるま座の提唱する路線が、どんなに日本の新劇運動を分裂させ困難に追いこもうとするものであるかを、開芸内の粘り強い意思統一で態度を鮮明にする日の近いことを、他の劇団は期待し望んでいるという発言がつづきました。

草案が採択された瞬間、会場には長い感動

※※※ 勵らく者の劇団は東リ演に結集しよう ※※※

東リ演・東日本アリズム演劇会議は、

一九六三年夏、一年前にうまれた西リ演の援助もあって、岐阜のはぐるま名古屋の演集、静岡芸術劇場、京浜協同劇団のよびかけで創立されました。

働く者が演劇をつくるということにはどういう意味があるのか、どういう理論と実践が必要なのか、どういう展望がもてるのかー自分たちのよつてたつ地点で、劇団の仲間と観客の仲間に学びながら、地道な舞台づくりを続けてきた私たちは、こうしたことがらをもつと深く、もつと正確につかみたい、そのためには他所の地点で同様に活動している仲間劇団と知り合い、学びあう必要があったのです。

又、安保闘争の経験から、芸術運動をつらぬく高い思想性の重要さ、統一してたかうことの大切さを教えられたことも、東リ演の組織をつくる梃子になりました。結成時の七集団が現在ちょうど三倍になります。

東リ演の活動をつらぬく高い思想性の重要さ、統一してたかうことの大切さを教えられたことも、東リ演の組織をつくる梃子になりました。結成時の七集団が現在ちょうど三倍になります。

的な拍手がわきおこりました。私はこの拍手

の中に、やつと「自分たちの西リ演」をとり戻せたという気持がしました。「よし、これなら、こんどこそ西リ演の方針を、劇団の方針として報告しもちこめるぞ」と思いました。

実際、私は、これまで西リ演のことを広島で報告するときも、「西リ演おつたら開芸や京芸やはぐるま座いう専門劇団があつて色々なことを教えてくれるぞ」とぐらんにしか話せませんでした。過去広島で、なんとか西リ演の会合や戯曲研究会などがもたれました。が、なるべく劇団員もぐるま座からもきてもらいました。しかし、話は有難いがどうも仲間のよな気がしないとか、その他のサークルも説いました。また「演劇教室」に西リ演の教師として開芸やはぐるま座からもきてもらいました。しかし、話は有難いがどうも仲間のよな気がしないとか、西リ演というのはもつとサークルが今困っている問題に触れてくれないで難いことばかりいうのが、といながら帰つていく人が多かったです。そんなとき、きまつてもちだすのは東リ演の話でした。あつちではこうやって交流会やゼミナールをやつている。こういう劇団もある……こういう話をもちだすとやつとサークルの仲間たちは「フムフム」と関

心を示しはじめるのでした。

西リ演の活動は、東リ演の徹底した連帯活動に学んで、今後根本的にその活動スタイルを改めねばならぬと思います。運動方針のひ針として報告しもちこめるぞ」と思いました。実際私はこれまで西リ演のことを広島で報告するときも、「西リ演おつたら開芸や京芸やはぐるま座いう専門劇団があつて色々なことを教えてくれるぞ」とぐらんにしか話せませんでした。過去広島で、なんとか西リ演の会合や戯曲研究会などがもたれました。が、なるべく劇団員もぐるま座からもきてもらいました。しかし、話は有難いがどうも仲間のよな気がしないとか、その他のサークルも説いました。また「演劇教室」に西リ演の教師として開芸やはぐるま座からもきてもらいました。しかし、話は有難いがどうも仲間のよな気がしないとか、西リ演というのはもつとサークルが今困っている問題に触れてくれないで難いことばかりいうのが、といながら帰つていく人が多かったです。そんなとき、きまつてもちだすのは東リ演の話でした。あつちではこうやって交流会やゼミナールをやつている。こういう劇団もある……こういう話をもちだすとやつとサークルの仲間たちは「フムフム」と関

のこととして他の劇団の活動を学んだら、どのようにか自分たちの血となり肉となることがあります。それも東リ演の活動から学び、「演劇会議」から知つたことです。私たちは、第六回総会で、東西リ演の兄弟的連帯とり戻せたことを大きなよろこびを成果とし、合同機関誌の発行、共同行動を一日も早く実現したいと思います。四人の代表を西リ演総会に送りこんで私たちを援助して下さった東リ演のみなさん本当に有難うございました。

■あとがき■

音たてて世界がうごいているその中で第八号をつくりました。

石和の運営委員会の討議をもとに、内容での充実と活版印刷化へ一歩前進!

そして、東西リ演合同会議できめられた本誌の合同発行体制は、いよいよ私たちの勇気を湧きたたせててくれます。

なお、私たちの演劇運動への温い理解から広告を提供して下さった、図書月販のご好意を感謝しています。

編集委員会

演劇会議 第八号

一九六八年六月一日 発行

定価 一五〇円 (送料三五円)

編集委員 萩坂桃彦・山村金平・黒沢參吉
発行所 川崎市上平間一二七五
電話川崎(52)八八一五番

印刷所 三信印刷所
横浜市南区前里町二ノ四四

HOLP

で

ご家庭の図書室をより豪華に♪

河出書房 世界文学全集 全25巻
￥22,500

新潮社 日本文庫全集 全50巻
￥26,000

世界大百科事典(平凡社)	全26巻	￥54,400
国民百科事典(平凡社)	全8巻	￥14,000
標準学習百科事典(学研)	全10巻	￥15,000
現代世界美術全集(河出書房)	全16巻	￥20,000
世界の歴史(中央公論社)	全17巻	￥8,160
日本の歴史(中央公論社)	全31巻	￥14,450
世界美術大系(講談社)	全24巻	￥60,000
世界の文化地理(講談社)	全19巻	￥47,500
えほん百科(平凡社)	全12巻	￥4,320
世界ノンフィクション全集(筑摩書房)	全30巻	￥19,500

ホルプのシステム3つの特徴

1. 全巻先渡し お申込みと同時に全巻を揃えてお届けします
2. 分割払い 読みながらお支払い下さい月々僅か1,000円程度の分割払い
3. 無料直送 日本中どこでも運賃当社負担でスピードにお届けします

お申込み・お問合せは下記へ

株式会社 図書月販

東京都新宿区市ヶ谷本村町39・第5ミナミビル
TEL 東京03(260)4891(大代表)